

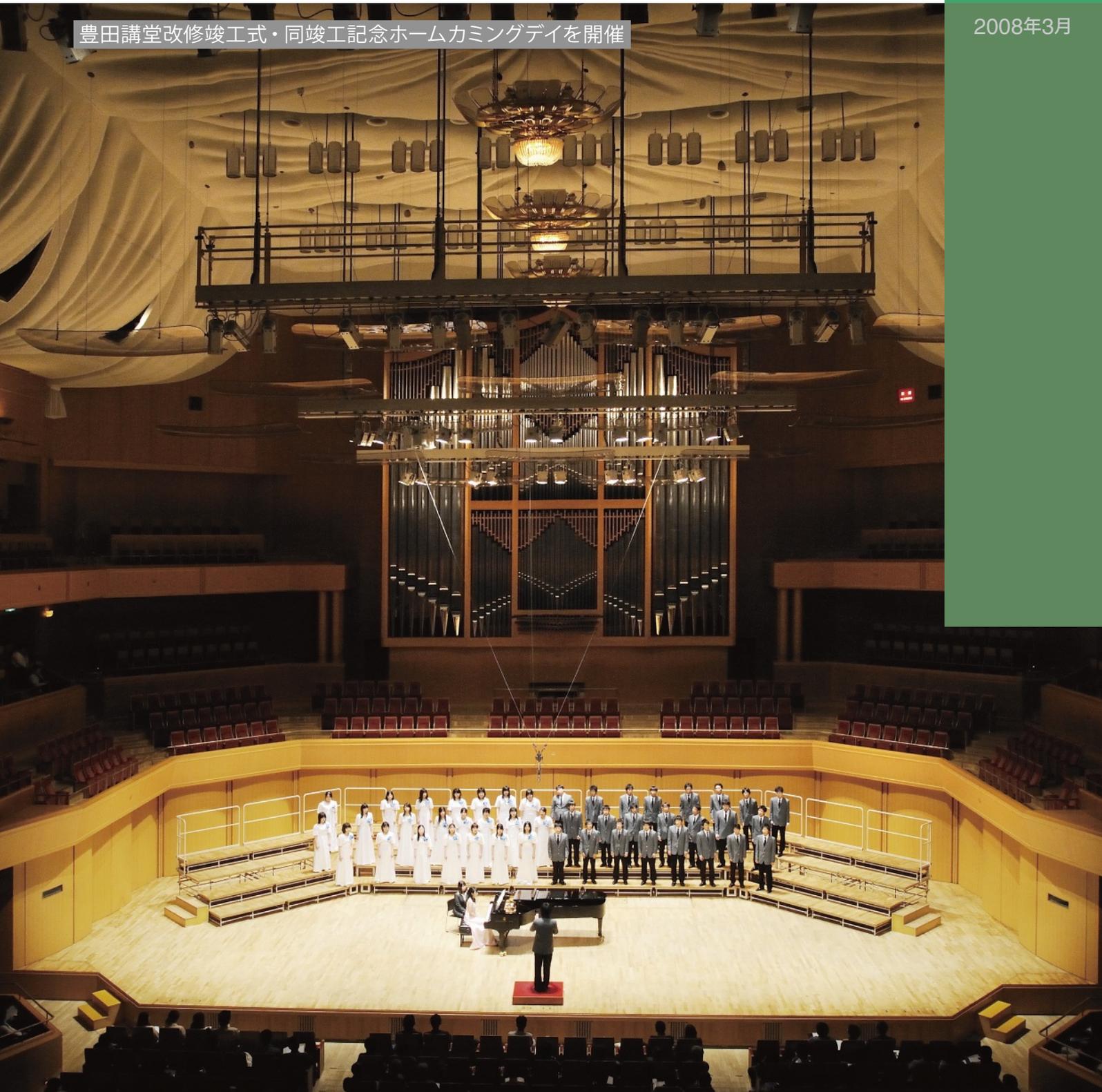
名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.178

2008年3月

豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイを開催



目次

●ニュース	
豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイを開催	3
「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」第2回シンポジウムを開催	8
ESD 促進ワークショップ・国際シンポジウム	9
～地球市民の視点から地球の未来を考える～を開催	
本学が平成19年度省エネルギー優秀事例全国大会「経済産業大臣賞」を受賞	10
本学が第2回日本ファシリティマネジメント大賞	10
「優秀ファシリティマネジメント賞」(2008JFMA 賞)を受賞	
第30回名古屋大学シニアの会を開催	11
中期目標期間の評価における教育研究評価に関する説明会を開催	11
平成20年度名古屋大学入学試験を実施	12
災害対策室が新潟県知事から感謝状を贈呈される	12
平成19年度個人情報保護に関する教育研修会を開催	13
第36回、第37回防災アカデミーを開催	13
●世界につながる	
ヒマラヤにおける氷河変動	14
藤田 耕史(大学院環境学研究科准教授)	
●学生の元気	
「ECO-MALL」～環境情報ポータルサイト～	16
黎 明(環境学研究科都市環境学専攻博士課程前期課程1年)	
2007年度名古屋大学学生論文コンテスト	17
●部局ニュース	
国際カーボンナノチューブ会議ー飯島澄男特別招へい教授就任記念ーを開催	18
平成19年度工学研究科懇話会「産学連携を通じた人材育成の現状と展望」を開催	18
グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」	19
第3回国際研究集会を開催	
国際シンポジウム「日本と海外の大学生に対するキャリア支援・教育の展望」を開催	19
第67回招聘セミナー「効果的な大学院研究室指導のための実践手法」を開催	20
農学国際教育協力研究センター第10回オープンセミナーを開催	20
第20回年代測定総合研究センターシンポジウムを開催	21
「ミクロの探検隊」を開催	21
●定年退職される教授のことば	22
●本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年1月16日～2月15日]	32
●INFORMATION	
キャンパスミュージアムマップを刊行	35
●イベントカレンダー	35
●名大トピックスの表紙で綴る学生課外活動	38
●ちょっと名大史	
横文彦氏と豊田講堂 —50年の時をこえて—	40

豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイを開催





2	3	4	5
6			

1

- 1 改修竣工を迎えた豊田講堂
- 2 開会のあいさつをする平野総長
- 3 祝辞を述べる豊田全学同窓会会長
- 4 祝辞を述べる横総合計画事務所代表取締役
- 5 祝辞を述べる松原名古屋市長
- 6 杉浦理事による説明と会場の様子

豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイが、2月2日(土)、昨年12月に改修工事を終えた豊田講堂において開催されました。当日は、厳しい寒さにもかかわらず、同窓生、学生のご家族、一般の方等、約2,500名もの参加がありました。

豊田講堂は昭和35年の竣工以来、約半世紀にわたり本学のシンボルとして、入学式・卒業式、学会、シンポジウムなど、教育・研究の場として利用されてきました。しかし、老朽化が著しいため、トヨタ自動車株式会社及びトヨタグループ各社のご寄附により、一昨年12月からほぼ1年をかけて改修・増築工事を行い、工事の完了を記念して、この度改修竣工式を執り行ったものです。また、本学の研究活動等を同窓生、学生のご家族、地域住民の方にご覧いただくため毎年秋に開催している「名古屋大学ホームカミングデイ」を、今年度は同竣工式と併せて開催することにより、関係者だけでなく、より多くの方々に新たな豊田講堂をご覧いただける企画としました。

■豊田講堂改修竣工記念式典

午前10時30分、トヨタ・パートナーロボットによるファンファーレ演奏で、華々しく式典の幕が切って落とされました。

平野総長の開会あいさつでは、関係者への謝意、改修完了の喜び、豊田講堂を教育・研究の発信拠点として更に活用していく旨の決意が述べられました。次に豊田章一郎全学同窓会会長（トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長）から講堂の多様な利用に対する期待及び教育研究機関として名古屋大学の益々の発展への期待を込めた祝辞が、また、豊田講堂の設計者であり、今回の改修にあたって設計を担当いただいた横 文彦株式会社横総合計画事務所代表取締役から講堂建設当時の思い出を交えての祝辞が、そして松原武久名古屋市長から改修完了を祝う祝辞がありました。

引き続き、杉浦理事から、今回の改修・増築の概要として、外観の復元、耐震補強、ホワイエ（アトリウム）の増設、ギャラリーの整備、客席の機能改善、舞台の機能改善について説明がありました。

最後に、今回の改修にあたりご尽力いただいたトヨタ自動車株式会社及びトヨタグループ各社、株式会社横総合計画事務所、株式会社竹中工務店、陶壁「和多津海（わだつみ）」を寄贈いただいた名古屋市に対して、それぞれ総長から感謝状が贈呈されました。



■からくり人形実演

竣工式と同時開催されたホームカミングデーの今回のテーマは、「ものづくり源流・からくりからロボットまで」としました。からくり人形は、江戸中期以降、庶民に親しまれたいわゆる木製ロボットで、日本人のロボット観を育むと同時に科学技術への興味の喚起という点でも重要な役割を果たし、ものづくりの精神は現代まで脈々と受け継がれています。

記念式典終了後、テーマの一翼を担う「からくり人形」の実演が、尾陽木偶師（びようでぐし）九代玉屋庄兵衛氏により披露されました。実演の司会進行は、予てより玉屋氏と親交があり、機械制御工学を専門とする末松良一本学名誉教授が務めました。おふたりは、NPO 法人からくりロボットのメンバーとして、アメリカでのからくり人形実演でもジョイントの経験があります。出し物は、「からす天狗」、「茶運人形」、「弓曳童子」の3題で、茶運人形の実演では、人形の服をはがし内部の詳しい仕組みの説明もありました。



■トヨタ・パートナーロボットによるパフォーマンス

からくり人形の実演に引き続き、トヨタ・パートナーロボットによる楽器演奏が行われました。パートナーロボットは、トヨタ自動車「人の役に立つ」パートナーとして開発したロボットで、これからの社会における「家庭内での家事支援」、「介護・医療支援」などの領域で、人をサポートしていくことが期待されます。人工唇を持ち、滑らかな指の動きを実現した4台のロボットが、トランペット、チューバ、ドラムをそれぞれ器用に演奏し、参加者にも馴染みのある曲が、約30分の間に6曲奏でられました。

■除幕式

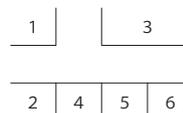
午後12時40分から、講堂入口に設置された3枚の銘板の除幕式が行われました。銘板にはそれぞれ、昭和35年の日付でトヨタ自動車工業株式会社（当時）からのご寄附により豊田講堂が建設されたこと、平成13年の日付で豊田合成株式会社からのご寄附により赤崎勇本学特別教授が開発した青色発光ダイオードを用いた時計台が完成したこと、平





成20年の日付でトヨタグループ10社からのご寄附により講堂の改修・増築が実現したことが記されています。

引き続き、今回の増築工事により豊田講堂と一体化したシンポジオンのエントランスホールに設置された陶壁「和多津海」の除幕式が行われました。和多津海は、加藤唐九郎氏が昭和45年に大海原の白波をイメージして製作した高さ2.8メートル、長さ6.5メートルの大作で、名古屋市職員研修所「修善寺荘」に寄贈され永らく飾られていました。この度、豊田講堂改修を記念して、名古屋市職員互助会から本学に寄贈されたものです。



- 1 からくり人形実演 からす天狗
- 2 からくり人形実演 茶運び人形の説明をする尾陽木偶師九代目玉屋庄兵衛氏
- 3 トヨタ・パートナーロボットによる楽器演奏
- 4 豊田講堂入り口に設置された3枚の銘板の除幕式
- 5 シンポジオン入り口ホールに設置された陶壁「和多津海（わだつみ）」の除幕式
- 6 名古屋市職員互助会から本学に寄贈された陶壁「和多津海（わだつみ）」





■竣工記念パーティー

午後1時から、シンポジオンホールにおいて、関係者約300名が参加して、竣工記念パーティーが開かれました。総長からのあいさつ、齋藤英彦全学同窓会副会長からの来賓あいさつに続き、鏡割りが行われました。丹羽宇一郎全学同窓会副会長から乾杯の発声があり、参加者一同で豊田講堂改修竣工を祝いました。

■トークセッション「日本の教育を考える」

午後2時40分から、パネリストに丹羽宇一郎伊藤忠商事株式会社取締役会長、郷 通子お茶の水女子大学長、辻村哲夫国立美術館理事長、コーディネーターに小出宣昭中日新聞社常務取締役役をお迎えして、トークセッション「日本の教育を考える」が開催されました。前半は、日本の初等中等教育の現状と課題を中心に、家庭や大人の振る舞いが子どもに与える影響、学習指導要領の改定が「ゆとり教育」という造語としてひとり歩きしたことにより発生



1	2	3	7	8
4				
5	6	9		

- 1 竣工記念パーティーにおいてあいさつする平野総長
- 2 来賓あいさつをする齋藤全学同窓会副総長
- 3 乾杯の発声をする丹羽全学同窓会副会長
- 4 トークセッションにおいてあいさつをする平野総長と会場の様子
- 5 パネリストの丹羽取締役会長、郷学長、辻村理事長
- 6 コーディネーターの小出常務取締役
- 7 豊田講堂の歴史展にて豊田佐吉翁の肖像画をご覧になる豊田章一郎会長
- 8 地球温暖化により変貌するヒマラヤの氷河に関する写真展（共催：朝日新聞社）をご覧になる豊田会長
- 9 貴重書の展示会場の様子





した誤解と学習指導要領の真の目的、少子化という環境が招く弊害等について討論を行い、後半は、高等教育のあり方について、大学での英語による授業の導入、学生を主体としてのカリキュラム編成、理系文系という垣根にとられない教育等、各パネリストから独自の視点で指摘がありました。最後に各パネリストから、本学に対して、日本の中で安住することなく、国際的競争力をつけて世界的に通用する大学になって欲しいとの期待が寄せられました。コーディネーターの軽妙な進行と、パネリストの真剣かつウィットに富んだ発言に満員の聴衆は惹きつけられ、予定時間を10分以上超過して、トークセッションは終了しました。

■展示コーナー

豊田講堂2階では、豊田講堂の歴史展及び朝日新聞社との共催で地球温暖化により変貌するヒマラヤの氷河に関する写真展等が開催されました。

■貴重書の展示 ～学報の表紙を飾った貴重書～

豊田講堂3階では、本学が保存する貴重書の展示が終日行われました。トマス・ホプズ著「リヴァイアサン」(初版)、ユークリッド全集(グレゴリー版)(初版)など、平成16年度まで本学の学内機関誌として親しまれた「学報」の表紙をシリーズとして飾った貴重書等が展示されました。



「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」 第2回シンポジウムを開催



メイン会場の様子

「分析・診断医工学による予防早期医療の創成」プロジェクト第2回シンポジウム「予防・早期医療の実現をめざして～手のひらに名医・大病院を」が、1月30日(水)、東京・神田の学士会館において開催されました。同プロジェクトは、平成18年度文部科学省科学技術振興調整費「先端融合領域イノベーション創出拠点の形成」プログラムの新規課題として採択され、本学が協働企業4社（日本ガイシ株式会社、伊藤忠商事株式会社、富士通株式会社、オリンパス株式会社）と共に推し進めているものです。

当日、会場には企業・大学・研究所等の研究者や、産学連携の関係者、また、医療技術に関心の高い一般の方が広く集まり、参加者は450名にのぼりました。シンポジウム開始前には早くもポスターセッション会場が来場者で混雑し、まっすぐ歩けない程の状況となりました。また、メイン会場では立ち見が出る程の盛況ぶりとなり、同プロジェクトへの関心の高さを窺わせました。

メイン会場では、まずプロジェクト統括責任者の平野総長から式辞があり、このプロジェクトが未病者の健康管理から早期治療に関する一貫した社会インフラを提案するものであり、また、医学と工学、企業と大学という、分野もカルチャーも異なる研究者、技術者が連携しながら研究を推し進めている旨の紹介がありました。

また、森口泰孝文部科学省科学技術・学術政策局長から祝辞があり、同プロジェクトが取り組んでいる新ビジネスモデル創出を視野に入れた技術・ネットワーク開発、人材育成などに対する期待が述べられました。

基調講演では、科学技術の観点から、総合科学技術会議専門委員である梶谷文彦川崎医療福祉大学学長補佐から、「我が国のナノバイオテクノロジーの研究開発への期待」と題し、ライフサイエンスやナノテクノロジー分野は、総合科学技術会議の重点推進分野にも選定された分野であるという講演がありました。

次に経済的・日本の国際競争力育成の観点から、内閣府経済財政諮問会議議員の丹羽宇一郎伊藤忠商事取締役会長から、「日本の国際競争力と産学連携イノベーション」という題目で講演があり、その中で、天然資源の乏しい我が国にあっては、人材育成と技術競争力の確保こそ最も重要であり、産学をあげてそれに取り組むべきであるという力強いメッセージがありました。

シンポジウムの後半には、7つのテーマの口頭発表があり、隣接する会場では、16のテーマのポスターセッションを実施し、プロジェクトの進行状況とこれまでの成果をアピールしました。



式辞を述べる平野総長



祝辞を述べる森口局長

ESD 促進ワークショップ・国際シンポジウム ～地球市民の視点から地球の未来を考える～を開催



シンポジウムの様子



ワークショップの様子

持続可能な発展のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）促進ワークショップ・国際シンポジウムが、2月3日（日）、環境総合館2階第2会議室及び野依学術交流館2階カンファレンスホールにおいて開催されました。

本シンポジウムは、日本・ユネスコパートナーシップ事業として、文部科学省、中部ESD拠点のなごや環境大学及び中部大学の共催のもと、大学院国際開発研究科及び大学院環境学研究科が主催し開催されたものです。今回は、愛・地球博が行われた2005年6月に、ユネスコ・国連大学との共催により開催された第1回目のESD国際会議に続き、本学で開催される第2回目のESD国際会議となります。

「持続可能な発展のための教育」とは、2002年、南アフリカで開催されたヨハネスブルグ・サミットでの合意を受けて日本が第57回国連総会において提唱した概念で、ユネスコの一大大スローガンになっています。また、2005年から2014年が「持続可能な発展のための教育の10年」と位置づけられており、ユネスコを主導機関として関連国連機関等の協力により推進されています。「持続可能な発展」とは、

「環境と発展に関する世界委員会」が1987年に「将来の世代が自らの必要を満たす能力を損なうことなく、今日の必要を満たすような発展」であるという定義を打ち出したことに由来しており、次世代が不自由することなく生活できるようにするために、今私たちが何をすべきかを考え、実行していくことです。

当日の午前中は、環境総合館においてワークショップが開催され、竹内恒夫環境学研究科教授による趣旨説明の後、マイク・アダムセンリューネブルグ大学教授が「平和・人権教育：21世紀の地球市民の共存をめざして」、タミー・シェルカリフォルニア大学ロサンゼルス校研究員が「環境教育：温暖化と水問題を中心に」、また、ミモサ・オカンポフィリピン大学ロスバノス校教授が「ジェンダー平等教育：発展の持続性を考える」と題しグループ別セッションを行いました。また、なごや環境大学の特別公開講座「環境・地域・企業のつながりを考える」が、高野雅夫環境学研究科准教授を講師として、環境と愛知、三重及び岐阜の地域開発問題をテーマに開催されました。各グループ別セッションには合計160名の参加があり、ESDに関する大学及び大学院教育のカリキュラム構築のための活発な議論が行なわれました。

午後は、野依記念学術交流館において国際シンポジウムが開催され、平野総長及び木曾 功文部科学省国際統括官のあいさつの後、「持続可能な発展のための教育とファクター5」と題し、ワイツゼッカーカリフォルニア大学サンタバーバラ校教授による基調講演が行なわれ、引き続き、「ESDと未来の地球市民」と題し、中西久枝国際開発研究科教授による講演が行われました。国際シンポジウムには、300名を超える参加があり、盛況なものとなりました。



会場の様子

本学が平成19年度省エネルギー優秀事例全国大会「経済産業大臣賞」を受賞

本学における省エネルギーの取り組みが、平成19年度省エネルギー優秀事例全国大会で「経済産業大臣賞」を受賞しました。この大会は、エネルギー資源を効率的に活用し、製造業をはじめあらゆる分野における省エネルギー技術の向上・発展と具体的な省エネルギー活動の推進を図り、地球環境の大きな課題である温室効果ガス排出量削減に貢献するために開催されています。

全国大会に先立ち9地区で開催された地区大会には、全国126事業所から135事例の応募があり、このうち東海地区

大会は昨年9月26日(水)、27日(木)の2日間、名古屋市公会堂で開催され、本学を含め18事例の発表がありました。本学からは「名古屋大学における省エネルギー活動事例」と題し、平成16年度から行っているエネルギーマネジメント研究・検討会の活動を核に、各部署における具体的な省エネ活動事例の紹介、施設管理部のホームページを通じての具体的な省エネ啓発・検証活動などの取り組みや成果などを発表しました。その後、地区審査委員会及び中央審査委員会による現地調査等を経て、栄えある「経済産業大臣賞」(3事例)の受賞が決定しました。

授賞式は、1月30日(水)に東京ビッグサイト国際会議場で開催され、翌31日(木)には加藤施設管理課長による事例発表が行われました。なお、2月22日(金)に同大会が大阪会場でも開催され、同様の事例発表が行われました。



表彰状を授与される杉浦理事(右)



同時開催された省エネルギー展(ENEX2008)において掲示された事例紹介パネル

本学が第2回日本ファシリティマネジメント大賞「優秀ファシリティマネジメント賞」(2008JFMA賞)を受賞

本学におけるファシリティマネジメントの取り組み「国立大学法人名古屋大学における戦略的ファシリティマネジメントの実践」が、社団法人日本ファシリティマネジメント推進協会(JFMA)が主催する第2回日本ファシリティマネジメント大賞において「優秀ファシリティマネジメント賞」を受賞しました。

同賞は、ファシリティマネジメント(FM)に関する優れた業績及び功績のあった組織と個人を表彰することにより、日本国内におけるFMの普及発展に資することを目的として昨年度から実施されているもので、今回の受賞は、本学がFM研究会(施設計画推進室、工学研究科、経済学研究科、環境学研究科、施設管理部)を中心に行っている取り組みが大学経営の中で重要な位置づけがされ、大学改革に対して貢献していることが評価されたものです。

授賞式は、2月14日(木)、日本におけるFMの普及定着を図り、ファシリティマネジャーの育成の推進を目的にパシフィコ横浜において開催された「JFMAフォーラム2008」において挙行されました。まず、最優秀賞を含む受賞者による4件のJFMA賞受賞発表会があり、本学からは、山口施設管理部長による発表が行われました。その後、日本ファシリティマネジメント推進協会会長から優秀FM賞4件、技術賞1件、功績賞2件、奨励賞3件の組織と個人に、表彰状と記念品の楯が授与されました。

なお、JFMA賞受賞発表会の内容については、施設管理部のホームページに掲載されています。



「優秀ファシリティマネジメント賞」表彰状と楯

第30回名古屋大学シニアの会を開催

第30回名古屋大学シニアの会が、2月2日(土)、シンポジオンホールにおいて、会員100名、役員等9名、事務企画連絡協議会構成員46名の計155名の出席のもと、開催されました。

この会は、本学において課長補佐相当以上の職にあった者で、退職・転出した職員と、本学の事務局長はじめ部長・



会場の様子

課長・事務長等との相互の交流を深め、また本学の運営に資することを目的として、毎年恒例の行事となっているもので、今回は、豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイに併せて開催されました。

会は、平野総長による本学の現状等の報告を兼ねた歓迎のあいさつで始まり、本学の幹部職員の紹介が行われた後、シニアの会を代表して、内田弘保元事務局長（二階堂学園常務理事）からあいさつがありました。続いて、高橋事務局長の発声で乾杯が行われ、会員らが旧交を温める輪が会場のあるこちらで見られるなど、終始和やかな雰囲気です。



あいさつをする平野総長



あいさつをする内田元事務局長



乾杯の発声をする高橋事務局長

中期目標期間の評価における教育研究評価に関する説明会を開催

「中期目標期間の評価における教育研究評価に関する説明会」が、1月23日(水)、独立行政法人大学評価・学位授与機構より川口昭彦理事及び平田公明評価第2課長を講師に招き、野依記念物質科学研究館講演室において開催されました。

中期目標期間の評価は、文部科学省国立大学法人評価委員会が総合的に行いますが、教育研究評価に関しては、評価委員会から同機構に実施が委託されています。同評価は、評価結果を次期の中期目標・中期計画の検討に資するだけでなく、次期中期目標期間の運営費交付金の算定に反

映させる観点から、中期目標期間の終了に先立ち来年度(平成20年度)に、平成16年度から平成19年度の活動実績を対象として実施されます。

同説明会は、学内関係者の教育研究評価に関する共通理解・認識を深めることを目的として開催されたもので、松下副総長のあいさつ後、川口理事から、平成20年6月末までに同機構へ提出する実績報告書のうち、学部・研究科等が作成する現況調査表を中心に説明があり、参加者は熱心に聴き入っていました。

当日は、理事、副総長、総長補佐、部局長、計画・評価担当者等参加者は100名を超え、教育研究評価に対する関心の高さがうかがえました。また、各部局では現況調査表の作成時期であるため、講演後には、活発な質疑応答が行われ、有意義な説明会となりました。



講演する川口大学評価・学位授与機構理事



会場の様子

平成20年度名古屋大学入学試験を実施

平成20年度名古屋大学入学試験（一般選抜の個別学力検査）が、2月25日（月）、26日（火）の2日間、東山地区・河合塾千種校・大幸地区の3地区の試験場で行われ、合計1,718名の募集人員に対し、4,866名が受験しました。

試験当日は、豊田講堂前庭やグリーンベルト周辺に受験生が朝早くから集まり、引率教師からの試験前の注意事項



試験会場の様子

に耳を傾け本番に備えていました。また、受験票を片手に緊張した面持ちで来学した受験生を案内する職員や学生の姿がキャンパスのあちらこちらで見られました。

1日目は、午前9時30分から外国語の試験が9学部において一斉に始まり、午後には、理科、地理歴史、小論文の試験が行われました。また、2日目には午前9時30分から数学の試験が、午後2時から国語の試験が行われ、両日とも、平野総長、高橋事務局長が各試験場を訪れ、試験場主任や教職員を激励しました。各学部の試験は2日目の午後3時45分にすべて終了し、受験生はお互いに試験問題について話し合いながら、家路につきました。

また、合格発表は、3月8日（土）正午から豊田講堂において行われました。

災害対策室が新潟県知事から感謝状を贈呈される

2月4日（月）、泉田裕彦新潟県知事から災害対策室に対して感謝状が贈呈されました。これは、2007年7月16日に発生した新潟県中越沖地震について、新潟県災害対策本部が行ってきた活動への災害対策室の支援に対するものです。

災害対策室では、新潟県中越沖地震の発生当日から新潟県庁に入り、専門的知見から災害対応支援を行ってきまし

た。特に、発生翌日の新潟県災害対策本部会議において、知事からの「災害対応の状況をわかりやすく地図化できないか」との要請に応じたかたちで、発生翌々日に産官学民のメンバーからなる「地図作成班」を新潟県災害対策本部内に結成しました。

地図作成班は、日々刻々と変わる災害対応に不可欠な「通水復旧図」「災害状況図」「仮設住宅位置図」などをオンデマンド形式で作成・提供しました。8月10日の活動終了までに約200件の地図を作成し、地域ニーズを反映した災害対応の実現に大きく貢献しました。

この活動は「平成19年新潟県中越沖地震復旧・復興 GIS プロジェクト」という、GIS（地理情報システム）を利用した効果的な災害対応の仕組みを考える新たな「知の創造」プロジェクトに発展しており、災害対策室は、京都大学防災研究所、京都大学生存基盤科学研究ユニット、新潟大学災害復興科学センター、横浜国立大学安心・安全の科学研究教育センターのメンバーとともに、このプロジェクトも支援しています。



感謝状贈呈式にて（左から2番目が木村災害対策室員）

平成19年度個人情報保護に関する教育研修会を開催

平成19年度個人情報保護に関する教育研修会が、1月31日(木)、国際開発研究科棟多目的オーデトリウムにおいて開催されました。

この研修会は、保有個人情報を取り扱う職員を対象に、個人情報保護に関する意識の高揚を図り、保有個人情報を適正に取り扱うことで、同時に情報漏えい等を防止するこ



講師の話に熱心に聞き入る受講生

とを目的として毎年実施されており、今回は約80名が参加しました。

はじめに、本学の個人情報総括保護管理者である高橋理事から開会のあいさつがあった後、小木曾保幸監査法人トーマツ名古屋事務所マネージャーから、監査人としての視点で、情報セキュリティ管理とその実現について身近な事例を挙げて講義が行われ、次に、竹内義則情報連携統括本部情報戦略室准教授から、情報システム管理者の視点で、情報漏えい等事案の紹介とセキュリティ対策について講義が行われました。

最後に、市橋克哉法学研究科教授から、今年度中に本学で実際に取り扱った入試成績情報及び患者診療情報を中心とした保有個人情報の開示請求等の事例を引き合いに、独立行政法人等の個人情報保護法等に基づく個人情報保護に関する基本的な定義、考え方及び実務上の留意点等について講義が行われました。

保有個人情報の保護に関する社会的な要請がますます強まる中、受講生は、タイムリーな講師の話に熱心に耳を傾けていました。

第36回、第37回防災アカデミーを開催

第36回防災アカデミーが、1月10日(木)、環境総合館レクチャーホールにおいて、災害対策室主催のもと開催され、鷲谷 威環境学研究科教授による「ひずみ集中帯～内陸大地震の謎を解き明かす鍵?～」と題した講演が行われました。

中部地方を縦断する「新潟・神戸ひずみ集中帯」は鷲谷教授らがGPS観測によって発見したもので、2004年中越

地震、2007年中越沖地震と、この帯の中で被害地震が連続発生したことから、今、大変な注目を集めています。今回の講演では、ひずみ集中帯とは何か、そこで何が起きているのか、といった内容について、基礎的な物理法則と観測事実にもとづいた説明がありました。「日本列島全体のひずみのうち半分がひずみ集中帯に集まっているが、残り半分はそれ以外の場所が担っている。地震に対する備えはどこでも欠かせない。」という講演に、114名の参加者は気持ちを引き締めていました。

続いて、2月18日(月)には、第37回防災アカデミーが開催され、高橋誠環境学研究科准教授による「スマトラ津波と復興～私が災害研究に惹かれたわけ～」と題する講演が行われました。

環境学研究科は文理融合の体制でスマトラ津波による災害過程の調査を進めています。高橋准教授はその中心メンバーとしてこれまでに5回現地に入り、主に巨大災害からの復興に関する問題点についての調査を行ってきました。今回の講演では、現地調査からわかってきた住宅再建問題や、海外援助のあり方について、豊富な事例をふまえた話が展開されました。



講演する鷲谷教授



講演する高橋准教授

ヒマラヤにおける氷河変動

藤田 耕史 大学院環境学研究科准教授

氷河は読んで字のごとく、「(自らの重みによって) 流れる氷の固まり」と定義されます。地球の陸上にある氷のうち、99%以上が南極とグリーンランドにあり、氷床と呼ばれています。残りの1%に満たない氷が、約16万個の「氷河」として世界各地に点在しています。量的には圧倒的に少ない氷河たちですが、気候変化への応答が氷床よりも早いいため、数百年といった時間スケールでは、海水準の変化へ大きく影響します。また、中央アジアのような乾燥域では、氷河は貴重な水資源となっていて、その消長は人々の生活に直結しています。南極・グリーンランドを除いた氷河のうち、面積にして約18%がヒマラヤを含むアジア高山域にあるとされていますが、欧米に比べ、氷河の調査・研究は立ち後れており、研究の空白域となっていました。

ヒマラヤにおける氷河の調査・研究は、1970年代初頭に名古屋大学の水圏科学研究所（現地球水

循環研究センター）を中心とする研究グループによって始められました。当時の大学院生らが中心となって研究計画を練り上げ、観測を実施するという、真のボトムアップ型の研究でした。この時の先達の研究成果を元に、1990年代に観測を行い、ヒマラヤ各地で氷河が縮小しつつある様子を明らかにしてきました（図1）。また、世界の他の地域で得られてきた氷河変動と比べることで、その縮小が急速に進んでいることもわかりました（図2）。

さて、この結果を見ると、「ヒマラヤでは余所よりも温暖化が進んでいる？」と考えたくなりますが、自然の摂理はそう簡単ではありません。残念ながら、ヒマラヤの4,000mを越える高所での気象観測は1990年代に始まったばかりで、温暖化云々を議論できるほどデータの蓄積がありません。そこで、氷河が気温の変化にどのように応答するかについて、数値計算による「実験」を行い



図1 ネパール・AX010氷河。左が1978年6月、右が2004年8月。

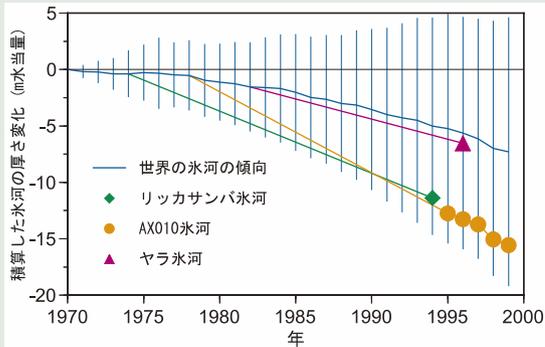


図2 世界の氷河の変動の様子とヒマラヤの各氷河の観測結果。

ました。その結果、「同じだけ温暖化した場合、ヒマラヤの氷河の方が欧米の氷河よりも縮小しやすい」ということが明らかになりました。その理由は「夏の降水」でした。モンスーンの影響により、ヒマラヤでは一年間に降る降水のほとんどが夏に降ります。氷河にとってちょうど良い環境では、夏の時期にほぼ0℃の気温になるため、氷河上に降る降水は「雪」として降ります。この雪は氷河を作る材料そのものであるだけでなく、太陽光に対する反射率が高く、氷河の融解を抑制する効果があります。さて、温暖化が進行すると、それまで雪で降っていた降水が今度は「雨」として降るようになります。雨自体に雪を融かす効果はほとんどありませんが、それまで白く氷河の表面を覆っていた雪が降らなくなることで、温暖化する前よりも吸収される太陽光が格段に多くなりま

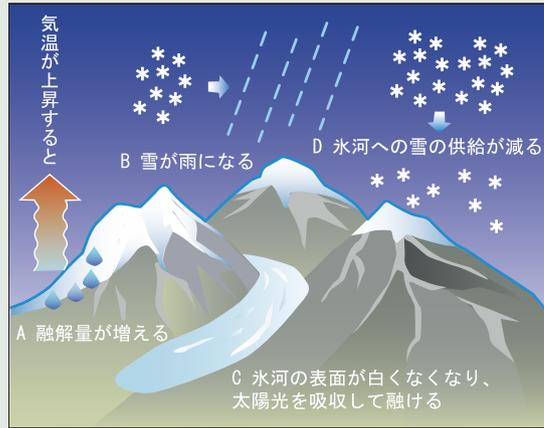


図3 ヒマラヤにおける氷河縮小の主要因。欧米の氷河では、Aの効果だけが作用。

す。この結果、温暖化は、氷河にとっての収入である「雪」を減らす上に、支出となる「融解」も促進させるという、二重の効果で氷河を縮小させることがわかりました（図3）。一方の欧米の氷河では、元々夏の降水が少ないので、温暖化によって融解が増える効果はヒマラヤの氷河ほどは多くありませんでした。

氷河は「温暖化のカナリア」といわれています。私たちの研究は、そのカナリアの強さ（弱さ？）にも、地域差があることを明らかにしました。現在は、わずか数点しかない現地での観測結果をヒマラヤ全域に応用するために、衛星データを用いた解析を進めています。

1969年生まれ。1992年京都大学理学部地球物理学科卒業、1998年名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了、2000年博士号取得。1998年名古屋大学大気圏科学研究所助手。2001年より名古屋大学大学院環境学研究科准教授。2002年から2004年にかけて、第44次南極地域観測隊としてドームふじ基地にて越冬。1998年中谷吉郎科学奨励賞受賞。2002年日本雪氷学会平田賞受賞。
 モットー：現場第一

ふじた こうじ



「ECO-MALL」～環境情報ポータルサイト～

キャンパスベンチャーグランプリ
名古屋産業人クラブ・CVG中部実行委員会・日刊工業新聞
コモ東海・オークマ・カインダストリーズ・新東工業・中部電力・デンソー・東海旅客鉄道・東邦ガス・トヨタ自動車



特別賞・日刊工業新聞社賞受賞の様子（左から足立信太郎、筆者、高平洋祐）

今、世界中で資源をめぐる市場競争が白熱化しています。石油、レアメタルといった貴重な天然資源が中国をはじめとする巨大な人口をもつ発展途上国に大量消費され、資源の市場価格高騰と枯渇、さらに温室効果ガスの排出、食料問題などの地球環境問題にも影響を与えています。一方、エネルギー資源がほとんどない日本は、今まさに将来の世界競争をどう戦うべきなのか、またその技術力をどう生かすべきなのかを見極めるときだと思えます。技術やノウハウなどは企業秘密であり、共有することが難しい状況ですが、地球環境問題の解決や持続可能な発展を成し遂げるには、世界トップクラスの環境技術大国である日本の環境技術を世界へ発信・共有・普及することが必要不可欠です。

これまで、海外市場開拓には商社を介して自社製品を売り込む必要がありました。また、独自に海外進出をしようと思えば、コーディネータや翻訳会社に委託しなくてはならず高いコストがかかります。そこでわれわれは、もっと手軽に中国の市場にセールスプロモーションする方法として環境情報のポータルサイトを立ち上げます。日本のいろいろな企業からの情報をアップし、中国のたくさんのユーザからアクセスできるようにします。そしてサイトを通じ中国のニーズがフィード

バックされます。さらに、エコモールの将来像として、オンラインショッピング、ビジネスマッチング、市場リサーチ、最新のエコ情報の配信の4つの分野を展開していきたいと考えています。

私達の活動は 環境保全に関する技術・製品・地域保全・資源の活動などの様々な情報を海外へ発信し、現地の環境部門およびNPO団体とともに啓発・普及に関するプロモーション活動を実施します。さらに、日中間の環境ビジネス、地域活性化の促進に努めていきたいと思えます。

本活動は去年7月、財団法人ソフトピアジャパンの助成により発足し、私達の「エコモール」プランは、第5回キャンパスベンチャーグランプリ中部で特別賞・日刊工業新聞社賞を、また大学発ベンチャービジネスプラングランプリで学生ビジネスアイデア奨励賞を受賞しました。

日中環境情報ネットワークプロジェクトチーム（代表：黎明）
ホームページ：<http://user.media.nagoya-u.ac.jp/people/s070258m/index.htm>
メールアドレス：mrei@urban.env.nagoya-u.ac.jp
（現在メンバー募集中です。興味がある方はお気軽にメール下さい。）



エコモールのイメージ図

れい めい
1979年9月1日生まれ
中国四川省出身



受賞式の様子

高等教育研究センターは、学部学生が論文を書くことの奨励を目的に、2007年度名古屋大学学生論文コンテストを実施しました。今回は、各自が社会問題に関するテーマを設定して論文を執筆し、1月10日(木)の応募締切までに提出するかたちで行なわれました。

同コンテストは、どのような知的職業に就く場合も筋道を立て第三者にわかるように論理的文章を書くスキル(いわゆる「アカデミック・ライティング」)が不可欠であること、文系・理系を問わず卒業生は、専門家としての即戦力よりも「日本語できちんとした文章を書ける」能力が求められること、批判的かつ複眼的の思考に基づいて論理を組み立てられる学生が社会に求められていること、論文を書くことは高度な知的探求の営みであり、純粋に「おもしろい」行為であると学生に実感してもらうことが彼らの学習意識や大学院進学への意欲を高めることにつながる、などの理由から開催されたものです。

今回は、最終的にのべ14編の応募がありました。学内教員による厳正な審査の結果、最優秀賞の該当者はなく、優秀賞に2名が選ばれました。

応募作品全体への講評として、多くの論文が身近で切実な社会問題を扱っていること、単なるエッセイや感想文ではなく「論文」を書こうとする意欲が伝わってくること、一定の調査に基づいて結論を導き出そうとする姿勢が窺えることなどが指摘されました。その反面、先行文献の読み込みが不足している論文が多かったこと、理系学生からの応募が少なかったことなどが今後の課題として指摘されました。

優秀賞に選ばれた論文は、受賞者に審査員のコメントをフィードバックした上で修正を加えたものを高等教育研究センターのホームページ <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/2007> に掲載しています。

高等教育研究センターは、引き続き2008年度も学生論文コンテストを開催します。

受賞者一覧

氏名	所属・学年	論文タイトル	講評
石井 信伍	文学部4年	「ニート批判」を問い直す —「自立・経済成長」イデオロギーの 批判的検討を中心に—	日常的に抱えている問題意識が十分に伝わり、多様な先行研究を駆使して書いている。
田中 香里	法学部1年	女子学生のジェンダー観と進路への影響	分析枠組みがユニークで、論文の展開にストーリー性があり、また新しい発見を提供している。

国際カーボンナノチューブ会議－飯島澄男特別招へい教授就任記念－を開催

グローバルCOEプログラム「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」は、2月14日(木)、15日(金)の両日、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(カーボンナノチューブナノエレクトロニクス)との共催により、野依記念学術交流館において国際カーボンナノチューブ会議－飯島澄男特別招へい教授就任記念－を開催しました。

「カーボンナノチューブ」は、直径が10億分の1メートルほどの極超微細な炭素(カーボン)のチューブ状物質で、1991年に飯島特別招へい教授によって発見された、21世紀のナノサイエンスとナノテクノロジーを担う最も重要なナ

ノ物質・材料といわれています。

同会議は、平成19年4月に設けられた「名古屋大学特別招へい教授」の第1号として同年8月1日付けで飯島特別招へい教授が就任したことを記念して行われたもので、はじめに平野総長からあいさつがあり、続いて飯島特別招へい教授による基調講演が行われました。次に、世界8カ国(アメリカ、ドイツ、オーストリア、スウェーデン、ブラジル、韓国、中国、日本)から分野を代表する20名の招待講演者が講演を行い、カーボンナノチューブの物理、エレクトロニクス、材料科学、化学を中心に極めて熱く活発な討論が行われました。

初日の午後からは、50件のポスター(内25件は招待ポスター)発表が会議と並行して行われ、参加者は熱心にカーボンナノチューブについて議論していました。

同会議には、内外の大学や企業等から200名を超える参加者があり、会場では多くの立ち見も出るほどの盛況となりました。



あいさつをする平野総長



基調講演をする飯島特別招へい教授

平成19年度工学研究科懇話会「産学連携を通じた人材育成の現状と展望」を開催

●工学研究科

大学院工学研究科は、2月1日(金)、同研究科大会議室において、平成19年度工学研究科懇話会「産学連携を通じた人材育成の現状と展望」を開催しました。

同懇話会は、大学院教育において、特に企業と連携して行っている高度理工系人材育成の現状について、産業界からの具体的施策等の意見交換を目的に実施されたもので

す。今回は、各企業から、浦田尚男三菱化学株式会社科学技術戦略室部長、大橋徹郎独立行政法人交通安全環境研究所理事長、川瀬三雄日本ガイシ株式会社商品開発センタージェネシオットプロジェクトリーダー、山内 毅株式会社デンソー生産技術部第4生産システム室長、宮部博史日本電信電話株式会社サイバーコミュニケーション総合研究所所長が委員として出席しました。

当日は、小野木工学研究科長からあいさつ及び産学連携の役割と意義について趣旨説明があった後、井上同副研究科長から同研究科が取り組んでいる教育の方向や産学連携の具体的施策等について現状説明がありました。その後、各企業で産学連携に携わり、要職にある委員から、大学の研究内容、大学院生の資質及び企業の経営理念等について活発な意見交換が行われました。

同懇話会の成果は、後日、報告書として取りまとめ、同研究科が今後教育カリキュラムを編成する上での貴重な資料とする予定です。



懇話会の様子

グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」 第3回国際研究集会を開催

グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」は、2月9日(土)、10日(日)の2日間、文学研究科において、第3回国際研究集会「Identity in Text Interpretation and Everyday Life」を開催しました。

現代社会を動かしている最も大きな原動力が情報であり、情報はテキストという形で我々の日常生活の中に存在



発表を行うオハローラン国立シンガポール大学教授

していますが、そのテキストの創造と解釈を左右する要因の一つが人間のアイデンティティである、というのが今回の国際研究集会の根底にある共通認識でした。

電子情報学、異文化間コミュニケーション学、言語学、文化人類学等の先駆的研究者を迎えて、12件の研究発表と最後の総合討論が英語でなされ、現代社会におけるアイデンティティは、文化や民族ごとに一面的に形成されるのではなく、情報の電子化と瞬時的流布によって情報の発信と処理能力のレベルごとに形成されていく面も出てきているという現実が、論点として浮上してきました。他方には、従来型のアイデンティティも厳然として存在し、アイデンティティの様相はますます複雑化し、様々な問題の理解を一層困難にしています。

こうした議論の流れの中で、最後の総合討論において、宮川 繁マサチューセッツ工科大学教授から「人類はおよそ150年前に自然系の学問と人文系の学問を分離するという過ちを犯したために、今の現実に対応できなくなっている」という非常に印象的な指摘があり、参加者は更に議論を深めていました。

国際シンポジウム「日本と海外の大学生に対するキャリア支援・教育の展望」を開催

現代 GP キャリア支援・教育開発センターは、2月1日(金)、国際開発研究科多目的オーデトリウムにおいて、大学院国際言語文化研究科、大学院教育発達科学研究科、高等教育研究センター及び名古屋産業教育研究会の共催のもと、国際シンポジウム「日本と海外の大学生に対するキャリア支援・教育の展望」を開催しました。



会場の様子

同シンポジウムは、文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代 GP)」に採択された「専門教育型キャリア教育体系の構築-専門教育の質的發展を通じた学生・院生の資質向上-」の取り組みの一環として計画されたものです。

当日は、杉山理事による開会あいさつの後、ケリー・ピショップ ミシガン大学キャリアサービス・就職センター所長、小杉礼子氏労働政策研究・研修機構統括研究員、寺田教育発達科学研究科長、柴田好章同研究科准教授による講演が行われ、日本、アメリカ及びドイツにおける大学生へのキャリア支援・教育について報告があり、引き続き、これからのキャリア支援・教育のあり方についてディスカッションが行われました。

今回は、学内外より約90名の参加があり、国内外の事例や最新の動向を共有でき、また本学の取り組みを発信できました。参加者からは、「海外の事例を学べて参考になった」「質疑応答の内容が大変有意義であった」との感想があり、大変意義深い一日となりました。

第67回招へいセミナー「効果的な大学院研究指導のための実践手法」を開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、2月5日(火)、第67回招へいセミナーを、文系総合館5階オープンホールにおいて開催しました。今回は、同センター設立10周年記念国際セミナーシリーズとして、リチャード・ジェームス メルボルン大学高等教育研究センター長を迎えて「効果的な大学院研究指導のための実践手法」と題して講演を行い、学内は



講演するジェームス センター長

もとより、学外からも多くの方が参加しました。

本学は約6千人の大学院生を擁しており、大学院生活に適應する際の支援や研究指導の重要性がますます高まっています。現実には、大学院生からの学生相談は増加の一途をたどっており、同セミナーは、こうした本学の状況に鑑みて開催されたものです。

ジェームス センター長は、講演の中で、オーストラリアの大学では、どのような条件のもとで大学院生の能力が発達し、学位論文作成について成功を取めることができるかについて関心が高まっており、そのための効果的な研究指導を実現するための諸要因や各専攻における効果的な環境整備のあり方が紹介されました。

また、参考資料として、「研究指導を成功させる方法－学位論文の作成をどう支援するか」(リチャード・ジェームス、ガブリエル・ボールドウィン著)の日本語版が配布され、それに基づいて議論が行われ、さらに、近年におけるオーストラリアの学位制度に関する政策動向について紹介があり、同セミナーは盛況のうちに終了しました。

農学国際教育協力研究センター第10回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センターは、2月12日(火)、第10回オープンセミナーを開催しました。

今回は、京都大学大学院地球環境学堂の田中 樹准教授を講師に迎え、「フィールドに学ぶとは－西アフリカ・サヘル地域の暮らしと環境を事例に－」と題して、一般に流布している「西アフリカ・サヘル地域は水不足である」、



セミナー参加者の質問に答える田中准教授

「砂漠化の解決には植林が有効である」、「牧畜民(の生業)が砂漠化を助長している」、「アフリカ農村の貧困解消には「増収」が必要」、「低地や湿地の利用には稲作がいい」といった思い込みを疑ってみる必要があることを力説しました。併せて、個別の事象の一般化の落とし穴にはまる危険性に注意を払う必要があること、具体的には、砂漠が毎年南下しているといった誤った情報が一人歩きをしている現実に、現場で事実を見る必要性を説きました。

年間100日以上を海外のフィールドでの調査研究に従事している講師は、サヘルの砂漠で牧畜の民と住み分けしている農耕民の在来農法の合理性に着目し、厳しい自然環境の条件下での生存の現実を観察し、外来の効率的、効果的とされる近代的な農法が土壌の劣化を招く現実の危険性を指摘しました。

今回のセミナーでは、学外からも含めシニア世代が約半数を占め、これらの方々からの熱心な質問が多く寄せられ、30分を予定していた質疑が1時間を超える熱気に満ちた討論が続きました。

第20回年代測定総合研究センターシンポジウムを開催

●年代測定総合研究センター

年代測定総合研究センターは、1月10日(木)、11日(金)の両日、野依記念学术交流館において「名古屋大学年代測定総合研究センターシンポジウム」を開催しました。同センターの共同利用研究の成果を報告するこのシンポジウムは、毎年1回開催されており、今年で20回目になります。研究者や学生の他、一般からの参加者を含めた77名の出席者を前



特別講演をする増沢教授

に、4件の特別講演と20件の一般講演が行われました。

初日は、中村年代測定総合研究センター長からの加速器質量分析計の現状と利用に関する報告の後、増沢武弘静岡大学教授及びモニカ・ベアテ大谷大学教授による特別講演をはじめ、 ^{14}C 年代測定法に関する講演が行われました。

その後、同センター運営委員、環境学研究科学生、分析計利用者からの意見及び事前に行ったアンケート調査をもとに、「年代測定総合研究センターの将来展望」についての自由討論が行われました。

2日目は、木村勝彦福島大学准教授及び鈴木和博本学教授による特別講演の後、考古学・地球科学の分野に、加速器質量分析計による ^{14}C 年代測定を適用した研究についての一般講演が行われました。

同シンポジウムへは、毎年、自然科学から人文科学に至る幅広い研究者、また一般からの参加があります。幅広い研究分野において年代測定がますます重要な役割をはたしていること、またその研究成果が一般の方々の興味をひいていることが確認できました。

「ミクロの探検隊」を開催

●博物館

博物館は、4回にわたり、医学系研究科附属医学教育研究支援センター分析機器部門超微形態室の協力のもと、「ミクロの探検隊」を開催しました。

11月3日(土)は、「いろいろな脊椎動物の赤血球を見よう」と題し、フナ血液塗沫標本を作ったほか、トノサマガエル、ラット、ウズラの血液標本を見比べ、赤血球



電子顕微鏡試料について説明する竹田教授

の大きさや核の有無を観察するとともに、走査電子顕微鏡を用い、赤血球を観察しました。12月22日(土)は、「ほ乳類の組織を生物顕微鏡と電子顕微鏡で観察しよう」と題し、生物顕微鏡を用いてタマネギと人間の口腔粘膜の標本を観察し、その操作に慣れた後、ラットの各組織を観察しました。その後、走査電子顕微鏡と透過電子顕微鏡を用い、機能と形の関係を学びました。1月12日(土)は、日進市教育委員会の共催、(株)日立ハイテクノロジーズの協力のもと、「海のプランクトン放散虫の化石を電子顕微鏡で見よう」と題し、同館に所蔵されている微化石放散虫を実体顕微鏡下で拾い、電子顕微鏡の試料を作成した後、走査電子顕微鏡で観察し、放散虫の形と地質時代を学びました。2月2日(土)は、日進市教育委員会の共催、(株)日立ハイテクノロジーズの協力のもと、「いろいろなムシを電子顕微鏡で見よう」と題し、竹田真木生神戸大学教授による昆虫の進化についての講演の後、実体顕微鏡下でクモや昆虫の電子顕微鏡試料を作り、電子顕微鏡観察を行ないました。

各回、小学生高学年を中心に大人まで15名ほどの参加があり、参加者からは「とても楽しかった。また参加したい。」などの声が寄せられました。



名古屋大学の課題

山田 弘明 大学院文学研究科教授

「家に帰って幼い娘の笑顔を見ると一日の疲れも吹っ飛びますよ」と、顔をほころばせる若い友人がおります。その気持ちはよく分ります。私の場合は毎日書物などを読み散らして授業の準備をし、それを学生が教室で輝くような笑顔で聞いてくれる時に疲れも吹っ飛び感じがします。もっともかれらはときどき寝顔になりますが、学生が卒業して社会に出て行くのを見るのも嬉しいことです。苦勞が報われたような気がするからです。そのような経験をしつつ名古屋大学で30年を過ごしました。思えばあつという間でしたが、静かな環境でじっくり勉強させてもらったという印象が強く残っています。

今や名古屋大学は法人化がらみで厳しい課題を背負うようになりました。社会からは大学を現代に見合うものせよとい

う要求がある一方で、本質を変えるなという声もあります。大学には変えてよい部分とよくない部分とがあるように思われます。学生の多様化や社会の変化に対応して、大学もそのシフトを変えるべきでしょう。どうすればよい教育ができるか、社会への説明責任をどう果たすかなどです。しかし名古屋大学の根幹は研究であり、これを変えてしまえば大学でなくなります。学問の仕方は変わっても、短絡的に孔子やソクラテスはもう要らない! となつては困ります。高度な研究を継承・発展させながら、学生や社会からの要請にどう応えて行くのか。これが名古屋大学の課題ではないでしょうか。



名古屋から世界へそして世界から名古屋へ

河野 正憲 大学院法学研究科教授

1999年に名古屋大学へ赴任してから瞬間に9年が過ぎた。この期間は大学にとってまた私にとってまさしく経済的な変革の時期だった。特に法学研究科では司法改革の一環として法科大学院設置の時期でもあり二重の意味での大変革であった。私自身、この時期に法学研究科長としてその準備にあたったことは、大きな思い出となった。法科大学院は、そもそもどのようなものとするべきか自体が明確でなく全てが手探りで進められ、各大学の独自のコンセプトを示すことが求められた。幸い、わが法学研究科では、スタッフ一同の一致協力の下問題なく設立ができ、またその後も順調に法曹教育が進んでいる。もっとも、これと共に研究体制の充実が不可欠であった。名古屋の研究を世界に発信し、そして世界の研究者が名古屋に関心を持つことを法学の世界で進める

ことが必要であった。幸いこれも、大型の科学研究費(学術創成)を得て、ドイツ・フライブルクに設置した研究所も順調に活動し、国際シンポなどにより、所期の目的を達成しつつある。

実に多忙で変化の多い年月だったが、充実した生活を送ることができた。なお2年名古屋大学で研究に従事するが、この間お世話になった内外の全ての人々に感謝したい。



祈念すること

福家 俊朗 大学院法学研究科教授

名古屋大学に赴任したのは1980年4月である。他大学での10年を合わせると大学という職場に38年間勤めたことになるが、内外の研究教育環境は必然的に大変貌を遂げている。むしろ、大学が社会にあって不可欠な存在であるためには、変わってはならないものがあるはずである。こんにちでは、学問分野を問わず何のために真理を追究するのかという「理由」を開示し、その現実的な応用として当然に可変的であることを避けられないが、大学の積極的で具体的な使命を提示して有言実行の応答責任を果たさなければならない。名古屋大学が、その名を冠した平和憲章を掲げて学術憲章を定めているのは、そのことを含意している。

しかし、現況はどうであろうか。教育はいうまでもなく、研究も一朝一夕に評価できないことを誰もが認めているの

に、絶対的に不足する運営費交付金やそれを補うために競争による獲得を強いられる外部資金には、比較しやすい数値に換算できる安直な評価方法が採用されている。曖昧さを許さない数値目標を達成するために、無定量の時間と労力が求められる自転車操業さながらである。

大学が時の権力に阿らない良心と自治によって社会に貢献してきた先進国にも、類似の現象が散見されるが、時間をかけて総合的にものごとを評価する物差しもある。そのような寛容の精神を育ててきた歴史と叡知に欠けるところで、名古屋大学が、敢然と掲げた使命を達成できることを切に祈るばかりである。



名古屋大学を辞するに当たって

加藤 久和 大学院法学研究科教授

私は結婚して以来はじめての単身生活を5年間だけ送るつもりで名古屋大学に赴任してきましたが、それが12年間にも及び、とうとう定年を迎えることになるとは当時夢にも思いませんでした。しかもそれは、私にとって私自身が大学生だった頃以来はじめてのキャンパス・ライフ（今度は大学教員として）だったのです。その間に大学がおかれた環境は大きく変化して、大学院重点化、大学の法人化、（そして法学部にとっては特に重要な意味を持つ）司法制度改革、法科大学院の設置など、激動と言ってもいいほどの変化が起き、かつて私が抱いていた静かな「学究生活」のイメージは見事に崩れ去りました。

考えてみればこれはごく当たり前のことで、大学も社会の動きから隔絶されたものではありません。伝統的にどちら

かという「お堅い」、「保守的」と思われてきた法学部も、大勢の留学生を積極的に迎え入れ、全国に先駆けて「アジア法整備支援事業」に乗り出し、東・中央アジア諸国に「日本法教育研究センター」を設置するなど、世界に向かって発信し続ける優れた学術交流・教育研究の場として目覚ましい発展を遂げています（私自身はそれに対して何の貢献もできませんでした）。ちょうどこのような時期に名古屋大学に身を置くことのできた私は幸せだったと思います。名古屋大学の今後ますますの発展を祈ってやみません。



激動の12年

吉田 純 大学院医学系研究科教授

私は平成8年2月1日付けで脳神経外科教授に就任し、本年3月31日で退職いたします。その間の12年2ヶ月は、日本の医療界、名古屋大学医学部、名大脳神経外科教室、そして私個人にとって激動の12年間でした。まず鶴舞地区の再開発が始まりました。新病棟から臨床研究棟、中央診療棟が次々新築され、脳外科としては術中MRI手術室とGMP基準のバイオマテリアルセンターが設置され、名古屋大学独自の先端医療開発施設を整備することが出来ました。次に大学の重点化です。名古屋大学が大学院大学となり、医学系研究科として再編成されました。脳神経外科学講座は脳神経病態制御学大講座の一分野となり、遺伝子治療学分野と脳血管内治療学分野を新設しました。法人化も大学での医療の方向性を大きく変えました。研究中心の大学が、医療経営や臨床実績を

高く評価するようになり、脳外科では手術件数の倍増計画を進める一方で、研究も基礎研究から探索研究にシフトし、寄附講座「バイオ医療学東レ」を立ち上げ、遺伝子・再生医療センターの構築と21世紀COEプログラムに参加しました。最後に医療制度問題です。初期臨床研修の必須化とマッチング制度の導入に端を発し、研修の自由度が増した反面、医局制度の崩壊と医師、看護師の偏在と不足による医療提供体制の崩壊、特に救急医療と脳外科を含めた外科系分野の危機が深刻になりつつあります。心配です。長い間に難うございました。



麻酔科とは

島田 康弘 大学院医学系研究科教授

私は1969年大阪大学を卒業し、この大学に教授として赴任したのが1985年ですから、もう22年になります。本当に長い間お世話になりました。

麻酔というものとは外科手術をする際に必要なもので、わざわざ医者がするものではないと高名な医者が言ったとか。しかし、現在の麻酔科学は術前・術中・術後をあわせてみる周術期の医者であるといえます。もちろん、外科手術の時に患者さんに痛みや不快な感じを与えないようにするのが主な仕事で、麻酔自身が患者さんを治すことはないのです。その意味で、医学の中では珍種といえます。私はライフワークとして、麻酔の安全と安心をあげています。一般の患者さんは、麻酔で人が死ぬなどとは思っていません。でも死ぬことはあるのです。医療者のうっかりミスもあるし、患者さんの状

態が悪いこともあります。いままで確率に関するデータは皆無に近いものでした。最近では日本麻酔科学会が主になって、学会所属の病院からはデータが集まるようになりましたが、世間には学会に属していない病院がたくさんあり、そのような病院からはデータは出てきません。私は、データを集めることや患者さんや家族の訴えを聞くことは自分の責任であると考え行動してきました。その意味で、麻酔事故が起きたときにはどのように対処すればいいのかについて学生に講義で言い続けたこともいとまとなってはいい思い出です。

私はこのライフワーク実現のため努力したいと思います。



絨毛癌との出会い

後藤 節子 医学部保健学科教授

名古屋大学在籍は、医学部医学科入学から44年間になりました。入学当時は、女子学生も未だ少なく、女子学生はとも目立ちました。今では半数近くになり、夢のようです。私は、一年間の岐阜県大垣市民病院での研修医期間を除き殆ど大学に在籍しました。大学での研究生活が何よりも好きだったからと云えます。

思い出に残っていることは、医学部産婦人科教室で、胎盤性絨毛癌患者さんの救命に懸命に取り組んでいた時期です。故石塚直隆教授の教授回診はとても鋭く、腫瘍マーカーHCGの正確な測定値を報告するために、教授回診前日にHCG-RIAの検量曲線と格闘し、また、屋上の寒い動物舎で先輩医師と夜遅くまでHCGによる兎卵巣の排卵後黄体を数えました。当時の婦人科病棟は絨毛癌患者さんが半数を占

め、毎月一人ずつ亡くなっていく状態でした。その後、前々教授友田豊先生の下に、絨毛癌病態の解析、薬剤耐性のメカニズム、癌細胞の抗原性、支持療法の開発など様々な努力を重ねました。現在の治療成績は、前癌病変である胎状奇胎症例の管理と前癌状態での治療の徹底、化学療法の進歩、CT・MRI画像による確実な転移巣の検出、腫瘍マーカーHCGの超微量測定の実現により、名古屋大学では死亡患者を観なくなりました。(未だ、欧米では15%死亡例が存在する状態です。)

絨毛癌克服の中心的役割を果たした名大産婦人科教室の一員であったことを、今も誇りに思います。



定年退職で思うこと

田伏 勝義 医学部保健学科教授

医療関係の領域に足を踏み入れて30数年以上になり、此の度定年退職をむかえる。20代の頃は「東京ゴミ戦争」の見出しがマス・メディアで目立った。ゴミ処分場である夢の島の状況が度々テレビに映し出され、東京都にとってゴミ問題対策は重要なもののひとつであった。現在新宿にある都庁の場所には清掃工場を建設する予定であったが実現しなかった。清掃工場の煙突から出るオイルミストの流れを調べるために風洞で実験するための資料を私は作成していた。しかし、埼玉県立がんセンターに転職し、医学物理士として医療関係の仕事に携わるようになった。その後間もなくして、世はまさに所得倍増に湧く時代となり、貯金の利子は8%以上にもなったが、やがて日本のバブル経済が弾けた。医療関係の仕事を通じて名古屋大学医療短期大学部に赴任することにな

り、学生たちの素直さや努力を身にしみて感じるようになった。短期大学部が4年制に移行するためには文部省の審査を受け認可を得る必要があり、教員が一丸となっていた頃が懐かしい。当初は一専攻で立ち上げようと試みられたが結局三専攻で申請し、文部省の認可が下りた。本館の建物は昭和13年に三菱重工の施設として建てられ、老朽化しており、そのうえ第二次世界大戦で爆撃を受けている。耐震テストが行われ、その判定がテストの度に異なり翻弄された感があるが、建設中の新館を祝して退職することになる。



定年退職にあたって

前田 尚利 医学部保健学科教授

名古屋大学に職を得た90年代は失われた10年と呼ばれています。人口構成の問題も年金の問題も話題にはなっていない時代です。日本の従属人口指数(生産年齢層が、残りを養う人数)は、0.45と低く、養育人口の大部分は我が子で、老人も今ほど多くはありませんでした。また高度成長と同時に少産少死の少子化傾向が始まった時代です。昨年が我が国の人口の最大のピークであるといわれており、年々人口が減っていくとされています。我々の世代は少子・少老人で、我々の生産した分は我々の世代で消費することができるという、いわゆる人口ボーナスの時代です。しかしながら、今大学で学ぶ学生が、社会の中核となる10年20年先には、面倒を見ないといけぬ老人の数が増え、人口の40%が、65才以上のお年寄りになるとされています。日本の従属人口指数は、

0.7となり、生産労働人口への負担がますます重くなってきます。これを人口オーナスと呼びますが、医療が発達し、住環境が改善し、ますます老人は長生きをするようになります。

このような人口構成の問題ばかりでなく、地球温暖化の問題、環境汚染の問題など、解決されるべき問題は山積しています。

私自身もあと2年で養われる世代に入りますが、定年が終わりでではなく、次の新しい出発点であると考えて、大学という場から離れて新しいことに挑戦したいと考えています。



臨床検査技師教育に携わって

伊藤 秀郎 医学部保健学科教授

昭和41年春に名古屋大学医学部附属病院検査部に検査技師として奉職し、56年4月に医療技術短期大学部に配置換となり「大学教員」のスタートを切りました。そしてここに無事定年を迎えることができました。この間、多くを学び、多くの知己を得て、豊かな経験を積み上げられたことに深謝いたします。

名古屋大学における臨床検査技師教育の始まりは、昭和36年4月に鶴舞キャンパスの片隅で産声をあげた医学部附属衛生検査技師学校です。54年には大幸キャンパスに3年制の医療技術短期大学部に衛生技術学科が設置されました。平成10年4月には長年の悲願であった4年制の医学部保健学科検査技術科学専攻に第1期入学生を迎え、さらに14年からは保健学科を基礎とした看護学・医療技術学・リハビリテーション

療法学の3専攻からなる大学院修士課程が設置され、2年後には修士課程を博士前期課程に改組し、それを基盤に博士後期課程が新設され、ようやく教育・研究体制が整いました。

医療技術短期大学部に移って驚いたことに、そこにはおおよそ研究設備と言えるものは無く、教育負担だけが重くのしかかってきました。保健学科や大学院を作ることが教育・研究環境の充実に繋がると信じて、微力ながら頑張ってきました。臨床検査技師教育は、今まさに胎動から躍動へと歩み始めたところです。本館が竣工した今、快適な環境で学ぶ後輩に次代を託したいと思います。



退職に際して

松田 勇 大学院工学研究科教授

有機化学に対して、漠然とした興味と憧れとは持っていたものの、学部3年までは研究の何たるかは知る由もなかった。偶然選択した有機金属化学関連の卒論を仕上げる頃、やっと研究の面白さを感じられるようになった。その後、研究テーマそのものは多少の変動はあったものの、現在まで一貫して有機金属化学の分野で仕事を続けることが出来たのは幸運そのものである。当初は、「有機金属なる面妖なもの」と陰口をたたかれたものの、現在では「有機金属なくしては、有機合成化学は成立せず」と言われるまでに成長した分野の、まさにその爆発的な発展段階と自分自身の研究者生命とが合致し、先駆的反応の開発に微力を尽くすことが出来た。これは偏に卒研時の指導教官であった石井義郎先生の先見性のお陰と感謝している。また、当時の助手の身分が任期、研究成

果の社会への還元とかは気にせず、ひたすら研究に没頭できた環境も大きく作用している。

入学以来通算45年間も名古屋大学に在籍したことになるが、その間にどれだけ世の中に貢献できたかと問われると、「これこれ」と胸を張って答えるだけの自信は持ち合わせていない。しかし、教員として採用されて以降、講義、学生に対する研究指導に関する義務は自分なりの姿勢は貫いて、誠心誠意盡くしたつもりである。ともあれ、長期にわたり我儘を通させていただきました先輩・同輩・後輩諸氏および事務サイドの皆様方に厚く御礼申し上げます。



ものづくりの学理を求めて

桑原 守 大学院工学研究科教授

早いものです。本学の鉄鋼工学科に入学して以来、45年の長きに亘って名大にお世話になりました。現在のマテリアル理工学専攻・材料工学分野の源流である当学科では、多様な分野出身の多彩な恩師から、広域科学に基づくものづくりの思想を学びました。教官就任後も、歴代の教官、同僚、若き精鋭諸氏と、本分野および名大の発展に微力ながらも貢献できたことを、先ず、感謝申し上げます。

周知のように、名古屋周辺には鉄鋼、車、セラミックス等、世界に類を見ない多様で有力な産業基盤があります。そこでのものづくり、ことに、製鉄分野での反応工学的手法に基づく学理構築と新プロセスの創出では、多くの経験と教育の機会を与えていただきました。大学開発の高炉の2次元数学モデル等が、産業現場での操業解析、操業設計に採用され

たり、産業界技術者への多くの再教育機会を与えていただいたり、産学連携や学会活動でもそれなりの活躍ができたことも大きな喜びでした。

教育の現場では、国交回復後の中国からの第1号留学生である謝裕生氏や、2代目の留学生で中国東北大学学長、また、名大第1号フェローでもある赫冀成氏等と研究・論文づくりをした以後も、多くの中国や、他国からの留学生の教育に携われたことも思い出深いものでした。

今後は、大学での学理構築の場から離れ、外国、日本の先端的産業界の研究現場で、環境に配慮したものづくりに挑戦しようと思っています。



第3の波から第4の波へ

沓名 宗春 大学院工学研究科教授

昭和38年に名古屋大学に入学し、金属工学専攻の博士課程を満了したのが昭和47年です。「重厚長大」の最中に、民間の重工業に就職し、10年間研究所でものづくりの実際を学んで、昭和57年4月に名古屋大学に戻ってきました。それから26年、この春定年を無事迎えることができました。こんな私が無事務められたのも、皆様方のご厚意、ご指導のお陰であり、厚く御礼申し上げます。1974年6月から1年間、MITに客員研究員としてボストンで留学生活を送り、欧米の文化や社会を勉強できたことは、その後の教育、研究生生活に大きな影響を受けました。9年間の学生生活、10年間の企業活動、26年間の教育・研究生生活は、自分を3つの環境に移し育てたことになり、物の見方や自分の学究生活をいろいろな角度から反省することができ、有益であったと思います。私が名古

屋大学に奉職した頃には「軽薄短小」が流行語となり、今もナノテクノロジーなどとして発展していますが、私の造語は「第4の波：光機電脳時代」で、今後も Advanced Laser Technology Research Center (ALTREC) を独自で設立し、今の研究・開発を続けたいと思います。社会の発展のため。



名古屋36年

宮田 隆司 大学院工学研究科教授

昭和47年4月に赴任して以来あっという間に36年、いろいろな事がありました。我が代は終戦直前の生まれで、ひもじい思いをした記憶は薄れているものの、毎日、麦入り飯やうどんばかりの食卓、校舎が足りずに二部授業の小学校生活、コッパンと不味いミルクの給食、たいていのことには不平、不満を言わずに育った世代です。60年安保のときには高校でストを打ち、一方でその後の高度経済成長の恩恵を十分に受け、東京オリンピックの円谷選手に感動し、大学院修士課程のときには、あの学園闘争（紛争?）。あれは何だったのか、何となく引け目を感じながら40年が経ってしまいました。教員生活の折り返し点ではドイツの友人宅でベルリンの壁崩壊数週間前の騒々しい雰囲気を受けたことを思い出します。

大学もずいぶんと変わりました。29歳の助教授のときに1年10ヶ月ほどドイツに留学しました。研究面では大した収穫はなかったものの良き友人に恵まれ、彼らの生活、考え方を肌で感じる得難い経験をしました。今の大学ではこんなことはとても許されないでしょう。90年代以降、これで良いのかと思うほど、大学は急激に変わりました。科学技術創造立国の建前と財政赤字のつけを誰が払うかの問題が錯綜する中、大学は厳しい時代を迎え、ひとりひとりの教員にとってもよほどしっかりしていないと方向を見失ってしまう時代となりました。自戒の念を込めてこの危機を乗り越えて頂きたいと思います。



退職を目前に控えて

坂田 誠 大学院工学研究科教授

私が博士課程（現在の後期課程）の学生として、他大学生であるにもかかわらず名古屋大学にお世話になるようになってから、早いもので、35年近くが経ちます。その間、短期間ながら助手として在籍したり、イギリスに滞在したり、色々ありましたが、縁があって実に長い間、名古屋大学にお世話になりました。

研究の関係上、初期の頃は中性子回折を使った研究をしていたので東海村の原子力研究所、助教授になってからは、放射光科学の研究に移行したので筑波のフォトンファクトリー、最近では世界最大の放射光施設 SPring-8などに行くことが多く、大学を留守にすることも多かったのですが、名古屋大学工学研究科はおおらかに、外部の大型研究施設を使った研究を自由にさせてくださいました。

名古屋大学は優秀な学生さんが集まる場所であるし、スタッフにも共同研究者にも恵まれ、私なりに充実した研究生生活を送ることが出来たと思います。唯一、私が誇れるのは研究成果よりも、楽しく研究できたことだと思っています。最近は、外部資金獲得のためにストレスの多い研究生生活を送っている方が多くなっているように思います。楽しい感情を伴うときに、脳は活発に活動し、創造力が高まるような気がします。その様な場を、提供してくださったので、私もそれなりに研究が出来たように感じております。

言葉では尽くせませんが、皆様大変に感謝しております。



生命科学の時代に思う

福田 勝洋 大学院生命農学研究科教授

私は昭和38年に名大に入学し、平成20年に名大を去ります。名大での在籍は、学部生、大学院生としての6年間、教授としての12年間（11年9月）になります。その間、東京、筑波と移動し、産（大正製薬）、学（東京大）、官（農水省）を経て、回遊魚が母川に戻るが如く母校に戻り、後進の指導にあたりました。

大学に入学した頃は、理工科ブームと言われる工学部全盛の時代で、大きな書店の専門書コーナーでも工学系の図書ばかりで、生物系の図書は少なく、私の専攻する農学系と言えば、棚の片隅に数冊あるかないかのような状況でした。今ではライフサイエンス、バイオテクノロジーが脚光を浴び、生物関連の図書が書棚に溢れる時代となりました。隆盛の生命科学も、注目されない時代に地道な努力を重ね、データを

蓄積してきたことが基礎になっています。

昨今の文部科学行政は、時代に合う分野を重視し成果を急がせますが、過去の例から言えば、飛躍的な発展は現在注目を浴びていない分野から出てくると考えられます。若い頃、現在注目されている分野に進むのではなく、そうでない分野を注目されるようにしろ、と言われたものでした。

産学官を経た私には、心ならずもそうしたブームの一端で翻弄された時代もありました。母校に戻り、大学の良さは自由で闊達な気風の中で研究できることと改めて感じますが、そうした良さが次第に圧迫されていく不安を感じつつ、お世話になった皆様に感謝し、名大を去ります。



果物とともに35年、その隠れた価値

山木 昭平 大学院生命農学研究科教授

名古屋大学農学部において、果物の品質向上についての基礎研究を行い、周囲からは「美味しい果物を食べられていいな」と、羨ましがられたりもしました。ところでずっと気になることがひとつあります。「日本の果物は品質はよいが輸入品に比べて高い。だからもっと輸入したらよい」といつも言われる。本当に高いのだろうか。もし、殆どの果物が外国から輸入されたらどうなるか。春になると、この近辺ではモモ、ウメ、ナシ、少し足を延ばせばリンゴやミカン畑でのお花見、夏になれば緑の森、秋には果物の収穫の喜びと豊かさを与えてくれる。この様な風景はごく当たり前に、我々の日常生活の一つとして心の中に定着している。日本の文化の一環でもある。生産者は別にそれを意識しているわけではなく、美味しい果物により利益を得るために果樹園を整然と管

理するのである。もし、どの果物も輸入品となったら、このような光景はなくなってしまう。我々の大きな心の財産を失うことになる。我々は国産の果物の裏に隠れた価値（多面的価値）を見出すことは出来ないのだろうか。これは果物だけでなく稲作「緑の絨毯」についてもいえる。私は講義や機会あるごとにこのことを話すことにしている。21世紀は「環境との調和そして生物の共生」に基づいた新しい発想が必要である。これからの学生さんが「花も実もある緑豊かな人生」を送られることを期待します。名古屋大学の皆様には大変お世話になりました。



名古屋大学に期待することー国際化世界の中での役割分担と先導性ー

磯部 稔 大学院生命農学研究科教授

昭和38年に名古屋大学に入学して以来、45年間名古屋大学にお世話になった。この間コロンビア大学博士研究員での米国滞在期間2年間を除いても、長く名大の成長と共に歩んだ。天然物化学・有機化学研究の40年間には、国内外の多数の人々と交流することができた。この交流は学術研究を進展させただけでなく、この職業についての副産物として感謝している。また、社会への恩返しという気持ちで、名古屋メダルセミナー・有機合成化学国際会議（ICOS-15）の組織委員長を務め、日中若手のための有機化学会議を創設し、4年間のIUPAC（国際純正及び応用化学連盟）有機化学部会プレジデントという役割を果たした。これらは派生的に多数の国際貢献的仕事を生み出した。例えばIUPACプロジェクト（Strategic Planning for a new East Asian Network

for Organic Chemistry）や日本学術振興会のアジア研究・教育拠点形成事業（ACP: アジアの最先端有機化学）なども生み、中・米・泰の大学研究所と名大との学術協定締結にもつながった。21世紀の名大は、国際化している世界の中で有効な役割分担と、先導的牽引力となるべく、日々の研究・教育活動の中でもぜひ研鑽を重ねるよう期待したい。

最後に、共に研究を推進し、共に苦労し、楽しみを分かち合うことができた研究室員・卒業生・共同研究者の皆さんに、心から感謝する。



通称‘トリセンター’設立に会えて

島田 清司 大学院生命農学研究科教授

定年退職に合わせてエンジギアをスローにしようと思っていたら予想外に多忙になってしまった。平成18年度総長裁量経費プロジェクト「鳥類の感染症抵抗性に関する国際共同研究」が採択されタイのカセサート大学に研究推進締結のため出かけることとなった（幸い、かつて留学生だった卒業生たちが教授で助けられた）。このプロジェクトのおかげで次の目標「大型研究費の獲得」という発展をみる事ができた。平成19年度文部科学省特別教育研究経費採択（平成19-23年予定）にともない研究科附属鳥類バイオサイエンス研究センターが新設されたのである。昔から、愛知県は養鶏家禽産業のメッカであり、名古屋大学農学部・生命農学研究科は他大学にはない豊富な人材と先人の研究教育業績が蓄積されていた。加えて、現・元研究科長の尽力も計り知れない。

自分の寄与は幾分にも及ばないが、これまで一貫してニワトリ中心の研究をしてきたものとして誠に感慨深い。私の定年退職後も続く若い人材がさらなる発展に向けて動いている。誠に頼もしい。定年前1年間とはいえ、当センター長を勤めた立場からも、以前からの暖かいご支援に感謝する次第である。最後に、学内のテニス愛好家の皆さんにもお礼を。名大32年間健康でいられたのは皆さんのおかげです。ありがとうございました。名古屋大学の皆さん、法人化で多忙になっていますが、ぜひレクリエーションで健康を保ってください。



世界一幸せな人

梅村 浩 大学院多元数理科学研究科教授

その中年の男性はチベットにいる仏教の僧侶である。アメリカのある大学の心理学の研究者が彼を客観的に測定したところ、様々な状況下で極めて高い割合で、彼が肯定的な感情を持ち続けていることが脳波の測定から分かった。

この人はパリ生まれのフランス人である。それも文化的に非常にめぐまれた家庭に育った。父親は哲学者、母親は芸術家である。彼自身も生物学を学び将来を約束されていた。大学院生のときネパールに旅行をし、そこでチベット仏教に出会ってこれだと感じたという。ネパールに旅行する動機は母親の影響があった。そのままネパールに留まったのではなく、それから何年かはネパールとパリの間を行き来した。その頃はネパールにいれば生物学のことは忘れ、パリにいればネパールのことは忘れるというふうであった。パリで博士号

を取得したとき、これで一区切りにしようと思ひ、生物学を捨て僧侶となる決心をしたという。母親はこの選択に理解を示したが、父親は非常に悩んだという。彼自身はフランスでの生物学者としての将来が惜しいとは思わなかった。

このように幸せでおられるのは、仏教のお陰であり、同僚の僧侶も皆、高い肯定的な感情が脳波から観測される。誰でも仏教の修行をつめばこうなれると語っている。チベット仏教の基本は他に対する慈悲であるという。この人の世界観の何分一かでも身につけ、楽しく暮らしたいものである。

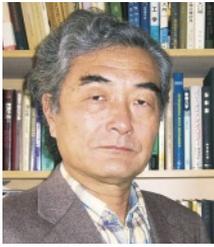


貢献は些細だが得たものは大きかった6年間

河合 崇欣 大学院環境学研究科教授

2002年4月に、つくばの(独)国立環境研究所から赴任して6年、この3月定年退職を迎えます。大学院専任担当講座の一員として文理融合推進に取り組むと共に、前任者（小川初代研究科長）の講義「資源・エネルギーと地球環境」を高野助教授と分担して引き継ぎました。持続性学グループに参加し、「環境人口論セミナー」を社会系の田淵講師（当時）らと始め、2005年度には体系理解科目講義「環境人口論」が立ち上がりました。また、名古屋大学21世紀COE（SELIS／安成哲三拠点リーダー）」に参画し、2003年から高精度環境変動解析グループ（G1）を担当しました。巡検を始め、学生達を連れてバイカル湖に行ったことは楽しい思い出です。しかし、「資源・エネルギー…」以外は退職と共に中断するという不十分なものになりました。一方、資源・エネルギー、

人口、新指標、植物の環境ストレス耐性などへの取り組みを通して、環境問題の基本構造認識に関する大きな欠陥を埋めることが出来、自分なりに納得のいく体系化ができてきたと思えるようになりました。これは、名古屋大学に来なければなかった大成果で、深く感謝しています。



楽しい研究生生活

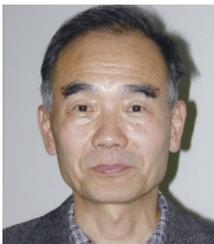
山田 功夫 大学院環境学研究科教授

大学卒業直後、ある小学校への赴任をやめ、「しばらく地震の勉強をさせてください」と理学部地球科学科の飯田先生（当時の地球物理学講座教授で故人）をたすね、いつの間にか40年過ぎてしまいました。1968年に理学部附属犬山地震観測所で地震の観測・研究を始め、12年間人里はなれた山の中の観測所で地震の記録を眺めていました。会議や学生指導の義務もなく、いま考えれば最高の研究環境でした。

理学部地球科学教室に移籍してからは、面白そうな研究を色々手がけましたが、なかでも月探査計画（LUNAE-A）は夢があり、楽しい研究でした。私はこの中で、月震観測システムの開発を担当し、メーカーの技術者やロケット工学の研究者など分野の異なる方々と設計や試験をするなかで多くを学ぶことができました。諸々の事情でLUNAR-A計画は中

断されましたが、この間、研究を十分楽しむことができました。ここで開発されたシステムは噴火している火山にヘリコプターで近づき、観測装置を設置するシステムなどで実用化されました。

私は10年ほど前に、地震火山・防災研究センター（いくつかの地震観測所等を統合・改組）に戻り、地震予知を中心の研究を再開しました。名古屋大学において40年もの間、楽しく研究生生活を送ることができ、周りの方々に感謝しています。



先輩、同僚、学生に感謝して

松尾 進 大学院情報科学研究科教授

1972年から工学部、教養部、情報文化学部、情報科学研究科と本学に勤務し、三月で定年退職することとなりました。

教養部の第一の任務は初年次学生の教育で、物理教室助手として物理実験の指導を始めました。工学部では同世代の大学院生と一緒に徹夜で物性実験をしていましたから、そのような研究を教養部でなんとか続けながら本来の任務の物理実験の指導をしたわけです。このときの先輩の先生方の物理実験に対する深い理解と真摯な教育には教えられるところが多々ありました。講義も担当するようになると、自分でかなり分かったと思えないと授業に自信をもてず、たいへん勉強になりました。そして、個性豊かな実力をもつ同世代や若い同僚、大学院生と協力し、興味ある分野で面白い研究を行うことができたのはたいへんありがたいことでした。これらの

ことが私の学問的な力の基礎となったと思います。故人になられた西田教授、いま北海道大学におられる石政教授、現在も同僚の森教授、熊本大学に移られた中野教授、そして研究をともにした院生たちにはとくに感謝しなければなりません。

教育の仕事は時間的に研究と二律背反的に感じることもありましたが、教育は大学にとって重要な役割で、私にとっては自分の物理の力を育てる基礎を与えてくれました。このように育ててもらった先輩、同僚、学生に感謝して定年を迎えられることを幸いに思っています。



良性のウィルスとして生き延びれたよき時代

廣木 詔三 大学院情報科学研究科教授

1974年8月1日付けで名古屋大学の教養部に着任した。夏休みなのですぐに来なくてもよいと言われた。8月16日に来て、翌日給料をいただいた経験がある。助手は将来のために、週2、3回の実習以外は研究をするようにという配慮がなされていた。当時はのどかであった。次のような話がある。一橋大学の学長を勤めた阿部郵也氏は、中世ヨーロッパ史の研究で名が知られているが、彼が小樽商科大学の講師に採用されたとき、辞令を受けとった後に翌年の四月まで、東京に居て、一橋大学の図書館で講義の準備をしたそうである。彼の『北の街にて』という本の中で回想している。さすがに今はそのような慣習はないそうである。よき時代であったと言える。

全国的に教養部が廃止され、東大には教養学部ができ、京

大は新しい大学院と一体化した。名古屋大学の教養部は情報文化学部へと変身した。独立大学院として人間情報学研究科が情報文化学部の上に設立された。ここまではよかった。やがて、人間情報学研究科は環境学研究科と情報科学研究科の設立にともなって廃止された。

生物学を重視しない環境学研究科には行きたくなかった。そして情報科学研究科に配置換えになった。私の専門は森林の生態学だが、院生の講義では生態系時空間情報特論というタイトルのもとで進化の最先端の情報を紹介した。情報科学には貢献できなかったが、良性のウィルスとして居座った。情報科学研究科に感謝しています。



お世話になりました

横澤 肇 大学院情報科学研究科教授

学生として9年、職員として31年、計40年にわたって名大にお世話になりました。この間、最初に赴任した教養部から、大学設置基準の大綱化による教養部の廃止に伴って設立された情報文化学部配置され、その後の大学院の重点化によって設立された情報科学研究科に移って教育研究に携わって今日に至っています。

勤め始めた頃の教養部には保健体育、外国語の先生方も所属しておられて、文系・理系のすべての学問領域を専門とする教員が集まった組織で、折に触れて知ることができた多様な研究対象は興味深く、よい刺激を受けたものです。

情報文化学部、情報科学研究科はともに、文系・理系の研究者がそれぞれの専門領域から多様な視点で学際的領域の研究教育を行う、文理融合型の部局として設置されました。残

念なことに他大学に設置された類似の部局の例をみても文理融合は難しいことのように、真の融合にはまだまだ時間と努力が必要のように思えます。私が一層の努力を傾けて欲しいと思うのは学生の教育に対してです。現状を料理にたとえるならば、様々な食材を生のまま皿に乗せて出しているように見えます。調理法や調理例を示し、どのような料理にすることができるのか見せてやるのが是非とも必要なのではないでしょうか。

最後になりましたが、ご厚情いただいた皆様、長い間お世話になりました。



環境医学研究所での内分泌学研究

妹尾 久雄 環境医学研究所教授

私は、1974年～1980年のシカゴ大学医学部 Refetoff 教授のもとに留学し、分子内分泌学の台頭を目の当たりにし、1980年環境医学研究所助手に採用されてからは、この研究手法の確立に努力致しました。1991年教授就任直後には前任教授松井信夫先生が始められた宇宙医学研究を継続し「搭乗者の内分泌反応」という課題で1992年9月12日～20日にスペースシャトルエンデバーの搭乗科学者を対象とした研究を成し遂げることが出来ました。1997年～2001年には米国内分泌学会の年次集会において京都大学の中尾教授と共に Trans-Pacific Symposium を企画・運営させて頂き、我が国、米国、オーストラリアの著名な内分泌学研究者と知りあうことが出来ました。2000年10月22日～27日に開催された国際甲状腺学会ではプログラム委員長を務め、大きな学会運営に参

加出来、貴重な体験となりました。また、日本内分泌学会や日本甲状腺学会主催の学術集会の開催や理事として学会運営に参加させて頂くことが出来ました。2000年～2004年には環境医学研究所長を拝命し、法人化前の国立大学の変革期における研究所の存続に東奔西走致しました。27年間の長きにわたり楽しい研究生活を送ることができたのは、我が国並びに米国、ヨーロッパの多くの先輩、同僚、友人の支えの賜物であり、この場をかりて深謝したい。



豊川での13年間

小川 忠彦 太陽地球環境研究所教授

豊川市にある太陽地球環境研究所に着任してから瞬く間に13年が過ぎた。着任早々に研究所の Newsletter に寄せた挨拶の概略は次の通りである。①中・低緯度や極域の電離圏に生起する擾乱現象の観測研究を進めるとともに、新観測手段を用いた共同研究や学生教育にも力を注ぎたい。②研究の活力を保つには、何よりも私を含めたスタッフの努力と学生の研究参加が必要である。学生に自然科学の面白さや科学技術の大切さなどを認識してもらえようようにしたい。③会議などのために東山キャンパスに出かけるのは一日仕事。早く東山に移転したい。④研究所は広い敷地と樹木に囲まれた静寂な好環境にある、との印象を着任前は持っていたが、…。

①は概ね順調に経過したと思うが、私個人の研究や教育を振り返ると、あまり満足できるものではない。また、②が十

分達成できたという自信は残念ながらない。ともに私の力不足であった。諸般の事情から、研究所の東山への完全移転は退職前には実現しなかった。しかし、今は人影もまばらで閑散とした豊川構内であるが、私にとっては快適な研究環境であった。春の山菜や秋の実りを賞味し、ソフトボール対抗試合やテニスに汗を流した。早々に東山へ移転していたなら、このような余暇を楽しめなかったことであろう。最後に、名古屋大学の益々の発展を祈念します。



さようなら、楽しい思い出と共に

小島 正宜 太陽地球環境研究所教授

大学入学以来の生粋の名大人であったが、昨年までの38年間は豊川の研究所勤め。豊川では、電波望遠鏡で宇宙空間を吹く太陽風を、地上から観測する方法を用いた研究に従事。発見間もない観測手法であったので、観測装置作りと平行して解析方法の開発から始めねばならなかった。これまで作った電波望遠鏡は、昨年完成したものを含め、国内に9基、米国内に1基の合計10基、受信面積に換算し全部で27,000m²。この電波望遠鏡や受信機作りを共にしてきた研究室や海外の仲間、企業の技術者の方々と永年のつきあいには楽しい思い出が一杯である。解析方法の開発では、トモグラフィ法の開発に成功し、見えなかった太陽風の詳細な構造がはっきりと見えるようになり、世界オンリーワンの観測ができるようになったのは嬉しかった。分解能の劣る、少々できの悪い観

測、諦めず辛抱、辛抱でやってきた甲斐があったと実感。法人化で中期計画だ、ロードマップだと言われるが、研究上で一番嬉しいことは、その計画にはなかった予期しないことが発見された時ではないだろうか。歩んだ道のほとんどは、淡々としており、その中での突然の発見は、多くはないが折り返し数えるくらいはあった。この淡々とした道を、根気を持ち鈍重の歩みをせねば、おもしろい発見も無かった。この道をこのように歩かせてくれた名大に感謝一杯である。



大変お世話になりました

小川 正毅 エコトピア科学研究所教授

名大には2004年より大変お世話になりました。この4年間は、長くも感じることもありましたが、振り返ってみると本当は短かったのだと実感しています。大学の使命は、人材育成にあるのですが、そのための方法論を把握しきれなかったというのが、私の現実でした。大変難しい問題だなとつくづく感じています。人材育成は、個別的具体論があって、総論が成り立つわけなのですが、具体論を体得するには経験がかなり積まないといけない。個々の講義やゼミはそれ自身楽しいのですが、回数を重ねないと内容が進化していかないということでもあります。名大退職後は、私立大学の学部学生教育に携われる可能性があり、私自身もその教育を通じて今後進化して行きたいと思っています。次世代育成は、日本の大問題でもありますし、教育に関するものの責務であります

から。今後とも、皆様とは教育の糸で結ばれて行きたいと思えます。あらためて、皆様と名大が充実した年を重ねられることを強く願っています。



「一般教養」重視こそ名大の課題

出原 泰明 総合保健体育科学センター教授

2002年4月から丸6年の名大での生活だった。教育学部の授業や大学院での議論も実に刺激的だったが、全学基礎科目の「スポーツ科学講義」と「スポーツ科学実習」は私のメインの実践群であった。授業研究が本職なので自分の授業そのものが研究対象となった。共通教養にふさわしい内容か、学問研究の土台作りになっているかをいつも考えていた。「スポーツ科学講義」ではスポーツを歴史と社会の結節点に位置づけ、学際的に把握することで見えてくる「文化の面白さ」を追求させた。文法経情教の1年生が健康や体力などの実用主義的なスポーツ把握を抜け出て、現代に求められる「知」の大きな構造のなかでスポーツを位置づけるようになる。自分の専攻が現代科学や現代思想の大きな枠組みと繋がっていることを「スポーツ文化論」の視点から接近させるのだ。「ス

ポーツ実習」はさらに楽しく、学生の変革と成長が目に見える時間の連続だった。大学生になってもうまくなれるのだ。この実体験によって能力観、学習観、発達観が変革される。上手と下手が教え合い、学び合い、学習集団として鍛えられていく。交流能力や集団的能力が高まっていく。高校までの教育では希薄だった部分の再生である。学問の土台となる社会的ヒューマニズムがここで作り上げられるのだ。「大学生に仕立て上げていく教育」は共通科目群、基礎科目群の蓄積によって支えられている。「これからの名大」でいっそう重視してほしいところだ。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
1 愛知県教育委員会は、本学や名古屋工業大学などと連携した数学や理科の学習プログラムの開発を行い、「愛知スーパーハイスクール」を支援	1.16 (水)	中日 (朝刊)
2 大学発ベンチャービジネスグランプリ発表会15日開催 本学・岐阜大学・中部大学・名城大学の4大学と提携した5つの株式会社などが参加	1.16 (水) 1.18 (金)	読売 中日 (朝刊)
3 「社会人講師入門講座」2月コースの受講者募集	1.16 (水) 1.22 (火) 1.26 (土)	読売 中日 (朝刊)
4 この人に聞きたい：国立長寿医療センター総長・大島伸一・元医学部附属病院長 東海市で初の官民病院統合	1.16 (水)	朝日 (朝刊)
5 本学や東海地方の自動車関連企業が、自動車のソフト開発目的に産学連携組織を4月に設立	1.17 (木)	読売
6 災害時の企業の危機管理 福和伸夫・環境学研究科教授	1.17 (木)	日刊工業
7 老年学：愛知淑徳大学教授・井口昭久・本学名誉教授 旅で知った患者の不安	1.17 (木)	朝日 (朝刊)
8 「名人」に聞く：フォーイン編集長・福田将宏氏・本学卒業生 情報分析を重要視	1.17 (木)	毎日 (朝刊)
9 読売講座：日中関係をテーマに16日開催	1.17 (木)	読売
10 名古屋大学交響楽団定期演奏会20日開催	1.17 (木)	中日 (朝刊)
11 松林嘉克・生命農学研究科准教授らのグループが、植物の茎の先端にある分裂組織の形成機構を解明	1.18 (金) 1.28 (月)	中日 (朝刊) 日刊工業 朝日 (朝刊)
12 大人もおもちゃ：ドイツ製のボードゲームを授業に取り入れている有田隆也・情報科学研究科教授は、「勉強への意欲を高め、考える喜びを知る教材」と話す	1.18 (金)	読売
13 東海地方 12月の地震：林 能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教	1.18 (金)	読売
14 外国人が話す日本語サロン「多様性の中の統一：インドネシア」19日開催：ファルダ・スライダーさん・本学日本語・日本文化研修生	1.18 (金)	中日 (朝刊)
15 ときめく GENJI の世界へ：高橋亨・文学研究科教授 『源氏物語』というテキスト研究の可能性	1.18 (金)	中日 (夕刊)
16 豊田講堂改修工事完了 18日報道陣に公開	1.19 (土)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
17 片山新太・エコトピア科学研究所教授らのグループが、微生物を使って PCB を無毒化する技術を開発	1.19 (土)	中日 (朝刊)
18 豊田スタジアム地下温水プールの天井落下事故で、豊田市は丸山一平・環境学研究科准教授ら有識者5人による調査委員会を設置	1.19 (土)	中日 (朝刊)
19 環境医学研究所の新所長に村田善晴・環境医学研究所教授が就任	1.19 (土)	朝日 (朝刊)
20 地震予測の新しい考え方「固着域」 山岡耕春・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授は、「固着域の考え方が計算を可能にした意義は大きい、地震発生前に摩擦データなどを観測できるかが今後の課題」と指摘する	1.20 (日)	読売
21 あしたがある：高田浩史氏・本学卒業生 主夫の日々に講演依頼	1.20 (日)	読売
22 川北一人・生命農学研究科教授らと愛知県の高校理科教師らが、「理科・大学連携 学習交流会」と銘打ち自主的学習を開始	1.21 (月)	中日 (朝刊)
23 教育学部附属中、高校中等教育研究協議会「人間・自然・社会と関わるサイエンス・リテラシーの育成ー学びの共有を軸にして」19日開催：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 「21世紀のサイエンス・リテラシー」	1.21 (月)	中日 (朝刊)
24 第18回高等研究院セミナー22日開催：門松健治・医学系研究科教授 「脊髄損傷は治せるか？」	1.22 (火)	中日 (朝刊)
25 「第5回キャンパスベンチャーグランプリ (CVG) 中部」 日刊工業新聞社賞は黎明さん・本学大学院生 『エコモール』ー中国向けの環境技術情報ウェブサイトの構築」、努力賞は山下圭太さん・本学学生 「SNS 的要素を取り入れた舞台情報共有コミュニティサイトの開発」が受賞	1.22 (火) 2. 4 (月)	日刊工業
26 指定席：小倉脩平さん・本学学生 和種馬に魅せられ和式馬術部を育てる	1.22 (火)	読売
27 College mode：鈴木まり子さん・本学学生 心に響く幻想 映画「テラビシアにかける橋」	1.22 (火)	中日 (朝刊)
28 KOSMOS フォーラム「宇宙と心」～宇宙に意思はあるか～11日開催：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授	1.22 (火)	中日 (夕刊)
29 教育発達科学研究科に「心理危機マネジメントコース」新設 4月から開講	1.23 (水) 1.28 (月) 2. 4 (月)	中日 (朝刊) 他2社 朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
30 プロフェッショナル訪問：環境学研究科附属地震火山・防災研究センター 地震発生メカニズムの解明を目指す	1.23 (水)	日刊工業
31 名古屋市中裏金問題 外部調査委員会 (委員長・市橋克哉・法学研究科教授) は、再発防止策を提言	1.23 (水) 1.24 (木) 1.25 (金) 1.30 (水) 2. 2 (土) 2.14 (木) 2.15 (金)	中日 (朝刊) 読売 日経 (夕刊) 読売 他2社 中日 (朝刊) 読売 中日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
32 名古屋市が子育て支援企業として10社を認定 審査会長・和田肇・法学研究科教授	1.23 (水)	中日 (朝刊)
33 愛知県医師会健康教育講座「ドライアイ」28日開催：杉田二郎・医学部附属病院助教	1.23 (水)	中日 (朝刊)
34 時のおもり：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 真のエコ見極めたい	1.23 (水)	中日 (朝刊)
35 近況心境：中西久枝・国際開発研究科教授 「持続可能な発展」教育を伝授	1.24 (木)	朝日 (夕刊)
36 読売新聞特別講座 1月で後期終了	1.25 (金)	読売
37 いのちを考える座談会 第9回「社会貢献」：名古屋第二赤十字病院長・石川清氏・本学卒業生	1.25 (金)	中日 (朝刊)
38 風向計：中京大学経営学部教授・浅井紀子氏・元本学助手 製造現場に通じる「大将」の役割	1.25 (金)	読売
39 訃報：阿部隆治・本学名誉教授	1.25 (金)	朝日 (朝刊) 他2社
	1.28 (月)	日刊工業
40 医学部附属病院では、患者による医師や看護師らへの暴言・暴力に対し、昨年5月から PHS を使った緊急情報システムを導入し、招集を受けた全職員で対応	1.25 (金)	朝日 (夕刊)
41 本学で仏教美術を学んだ小島梯次氏・円空学会理事 「誕生の地」でじっくり鑑賞	1.25 (金)	中日 (夕刊)
42 紙つぶて：福井康雄・理学研究科教授 UFO	1.26 (土)	中日 (夕刊)
43 アパレル企業にインターンシップで参加する佐野文香さん・本学学生	1.26 (土)	日経 (夕刊)
44 力士急死問題 本学による死因の再鑑定は「外傷性ショック死」と結論付けられる	1.26 (土)	読売
	2. 4 (月)	日経 (朝刊) 他2社
	2. 5 (火)	読売
	2. 7 (木)	日経 (朝刊)
	2. 8 (金)	読売
	2. 8 (金)	中日 (朝刊) 他2社
	2.10 (日)	朝日 (朝刊) 読売
45 病院の実力：骨肉腫 高い専門性と経験	1.27 (日)	読売
46 100 Answers :「仮にあなたが米国大統領になったとしたら、どんなことの実現に取り組みたいですか」に対し、坪井秀人・文学研究科教授は「消費社会のメタボ体質を改善し、省資源国家へ転換」と答える	1.27 (日)	朝日 (朝刊)
47 澤田誠・環境医学研究所教授らが設立した大学発ベンチャー・ティッシュターゲティングジャパンが、脳内に薬剤や物質を運ぶ科学合成分子「T2」ペプチドを発見	1.28 (月)	日刊工業
48 太陽地球環境研究所 (豊川市) で「豊川海軍工廠跡地保存をすすめる会」の見学会27日開催	1.28 (月)	毎日 (朝刊)
49 本学 今春から後期日程完全廃止	1.28 (月)	中日 (朝刊)
50 優秀な頭脳獲得 本学は07年度から人物や研究水準の優れた博士後期課程大学院生200人に、1人年額30万円の奨学金を支給	1.28 (月)	朝日 (夕刊)
51 健康東海プラザ 特集・医療相談：中村二郎・医学系研究科准教授 低コレステロール症	1.29 (火)	読売
52 東海三県 (愛知・岐阜・三重)「水素エネルギーシンポジウム in 愛知」28、29日開催	1.29 (火)	中日 (朝刊)
53 天文学講演会「新発見にあふれる、驚異の宇宙」2月3日開催：福井康雄・理学研究科教授	1.29 (火)	中日 (朝刊)
54 第4回中国語スピーチコンテスト3月22日開催：平井勝利・本学名誉教授	1.29 (火)	中日 (朝刊)
55 藤田保健衛生大学次期学長に藤田保健衛生大学医学部長・野村隆英氏・本学卒業生が選任される	1.29 (火)	中日 (朝刊) 他2社
56 頑張れ名古屋勢：名岐駅伝 チーム紹介	1.29 (火)	中日 (朝刊)
	1.30 (水)	
	2. 4 (月)	
57 豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイ2月2日開催	1.30 (水)	朝日 (朝刊)
	1.31 (木)	中日 (夕刊)
	2. 2 (土)	日経 (夕刊)
	2. 3 (日)	中日 (朝刊) 他3社
	2. 5 (火)	日刊工業 中日 (朝刊)
58 発言：医学部附属病院に通院中の患者様が医学生の実習に協力 患者の気持ちをくみ取ろうとする病院と前向きな医学生に感心	1.30 (水)	中日 (朝刊)
59 レーザー加工機器と加工技術の現状と今後：沓名宗春・工学研究科教授 工業半導体、技術向上で高性能・低コスト化進む	1.30 (水)	日刊工業
60 知と技の探究教育推進事業「探検講座全体発表会～大学・企業で学んだ高校生の発表～」28日開催	1.30 (水)	中日 (朝刊)
61 愛知国際病院理事長・川原啓美氏・本学卒業生が医療功労賞受賞	1.31 (木)	読売
62 ESD 促進ワークショップ・国際シンポジウム～地球市民の視点から地球の未来を考える～2月3日開催：中西久枝・国際開発研究科教授 「ESDと未来の地球市民」	2. 1 (金)	中日 (朝刊)
	2. 4 (月)	

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成20年1月16日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
63 美術の学校：木俣元一・文学研究科教授 「ギリシャ神話を描いた絵画を読む」16日三岸節子記念美術館で開催	2. 1 (金) 2. 6 (水)	中日 (夕刊) 毎日 (朝刊)
64 紙つぶて：福井康雄・理学研究科教授 「なんてん」講演会	2. 2 (土)	中日 (夕刊)
65 国立大学2次試験中間出願状況 本学全体で0.5倍 医学部医学科は1.2倍	2. 2 (土)	毎日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
66 「政務調査費の情報公開を求める名古屋市民の会」(会長・水田洋・本学名誉教授)が、名古屋市議会の五会派に政務調査費の全面公開を要望	2. 2 (土)	中日 (朝刊)
67 駐タンザニア特命全権大使・伊藤誠氏・本学卒業生が、タンザニアの情勢や愛知県の国際化について語る	2. 2 (土)	中日 (朝刊)
68 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 偽装問題の背景解明を	2. 3 (日)	中日 (朝刊)
69 加齢黄斑変性症 愛知淑徳大学クリニック院長・三宅養三・本学名誉教授は、「治療薬が承認されれば光線力学的療法 (PDT) との併用が期待できるほか、治療薬単独でも効果が見込める」と話す	2. 3 (日)	朝日 (朝刊)
70 環境学研究科に地球温暖化を専門に研究するコース新設	2. 4 (月)	朝日 (朝刊)
71 シンポジウム「広小路ルネサンス構想」3日開催：谷口元・工学研究科教授、中村英樹・工学研究科教授	2. 4 (月)	中日 (朝刊) 読売
72 マイナス80：竹内恒夫・環境学研究科教授 薪ストーブ (3)	2. 4 (月)	中日 (朝刊)
73 潰瘍性大腸炎・クローン病患者様のための講演会「楽しくいきいきと日常生活を送るために」23日開催	2. 5 (火)	中日 (朝刊)
74 牛乳市民講座「牛乳と健康」3月8日開催：松田幹・生命農学研究科教授	2. 6 (水)	中日 (朝刊)
75 中部の教育：愛知県私学協会会長・村瀬忠雄氏・本学卒業生 競争力は学力と直結	2. 6 (水)	読売
76 整膚看護ステーションオープン記念講演会21日開催：医療法人 広瀬クリニック院長・広瀬滋之氏・本学卒業生	2. 7 (木)	中日 (朝刊)
77 訃報：川村二郎・元本学助教授	2. 8 (金)	読売 中日 (夕刊)
78 サイト名「映像で綴る名古屋の400年」映像を制作したのは後藤幸一氏・本学卒業生	2. 8 (金)	中日 (夕刊)
79 風向計：家森信善・経済学研究科教授 金融知識のレベルアップ	2. 9 (土)	読売
80 紙つぶて：福井康雄・理学研究科教授 玉ねぎを炒める	2. 9 (土)	中日 (夕刊)
81 長良川河口堰建設 環境保護の立場から発言していた西條八束・本学名誉教授が亡くなったのをはじめ、地元関係者の高齢化も進み、反対運動は河口堰運用開始後下火に	2.10 (日)	毎日 (朝刊)
82 冷凍ギョウザ中毒事件 上島通浩・医学系研究科准教授は、「これらの中毒症状は、一度回復しても今後また症状が表れることが考えられる。疑わしい症状が出たら早めに医療機関へ」と話す	2.10 (日)	毎日 (朝刊)
83 高橋雅英・医学系研究科教授と室原豊明・同研究科教授のグループが、細胞に酸素や栄養素を運ぶ毛細血管形成のたんぱく質を発見	2.11 (月)	中日 (朝刊)
84 本学・東京大学・青山学院大学は共同で、カーボンナノチューブが超伝導現象を起こすことを初めて確認	2.11 (月)	日経 (朝刊)
85 本学・総合研究大学院大学・国立天文台などの研究チームは、「おうし座 FN 星」の周りにある原子惑星系円盤の直接撮影に成功	2.12 (火)	日刊工業
86 トータルヘルスプランナー (THP) 養成コース開講記念 公開シンポジウム 「高齢社会を地域で支える多職種協働アプローチ～包括的サービスの充実に向けて～」3月1日開催	2.12 (火)	日経 (夕刊)
87 文部科学省「先端研究施設共用イノベーション創出事業」第一回 名大・京大連携報告会26日開催	2.13 (水)	日経 (朝刊)
88 広小路歩道拡幅計画 (広小路ルネサンス) 森川高行・環境学研究科教授は、「歩道を広げればにぎわいが戻るのか、確固たる理由がない。もう少し議論が必要」と話す	2.13 (水)	読売
89 訃報：阿多実茂・元本学医学部教授	2.13 (水)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
90 各分野の有識者に聞く：植田健男・教育発達科学研究科教授 学校現場に予算を	2.14 (木)	毎日 (朝刊)
91 老年学：愛知淑徳大学教授・井口昭久・本学名誉教授 はつらつパリの高齢者	2.14 (木)	朝日 (朝刊)
92 第45回中部財界セミナー 「中部が創る新たな時代－更なる成長に向けて」14、15日開催：中部生産性本部会長・早川敏生氏・本学卒業生に今回のセミナーの狙いを聞く	2.14 (木)	日刊工業
93 書籍：「アトランティック・ヒストリー」バーナード・ベイリン著 和田光弘・文学研究科教授らが翻訳	2.14 (木)	朝日 (夕刊)
94 太陽地球環境研究所などの研究グループが、5000光年かなたに太陽系に似た惑星系を発見	2.15 (金)	中日 (朝刊) 他5社
95 第2回 EST 普及推進フォーラム1月25日開催：パネリストは加藤博和・環境学研究科准教授	2.15 (金)	日経 (朝刊)
96 東海地方 1月の地震：林 能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教	2.15 (金)	読売
97 わが友わが母校：川崎重工業執行役員・山下清司氏・本学卒業生 「七」という数字に縁	2.15 (金)	日刊工業
98 民主主義のこれから、これからの民主主義：布施哲・国際言語文化研究科准教授 粘り強く内実の定義を	2.15 (金)	中日 (夕刊)

キャンパスミュージアムマップを刊行

本学では、2月2日の第3回名古屋大学ホームカミングデイにあわせて、「名古屋大学キャンパスミュージアムマップ」を刊行しました。このマップはA4横2枚サイズの6つ折りのリーフレットで、博物館が取り組んでいる「東山キャンパス全体を“憩い”と“思索”と“交流”のスペースとするキャンパスミュージアム構想」に基づいて作成されたものです。

誌面構成や掲載コンテンツの収集は、キャンパスミュージアム小委員会と全学展示スペース検討ワーキンググループが関係部局の協力を得て行い、デザインは、工学部学生の協力を得て作成しました。

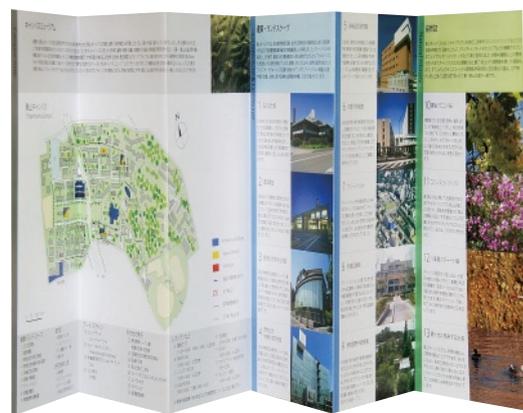
コンテンツは大きく「建築・ランドスケープ」、「自然誌」、「研究成果の公開」、「アート・デザイン」の4つに分かれており、部局で展示されているアート作品に光が当てられていることが特徴の一つになっています。また、東山キャンパスの地図の上にコンテンツ所在地や散策ルートとともに、学内のレストラン情報等もあり、キャンパスを訪れた人が気軽に散策を楽しみながら東山の自

然、大学の歴史、研究の一端に触れることができるように工夫されています。

東山キャンパスに加えて、鶴舞・大幸・豊川キャンパス等や本学に深く関わりのある歴史的遺構についても、いくつか紹介されています。

このキャンパスミュージアムマップにより、社会に開かれた名古屋大学への関心と親しみがより大きくなることが期待されています。

今後は、英語版やWeb版の作成も視野に入れつつ、コンテンツの収集を継続し、一層の内容充実を図っていく予定です。



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月15日(土)

場 所：経済学研究科・
カンファレンスホール

時 間：10:00~12:00

[問い合わせ先]

経済学研究科エクステンション・サービス

Fax：052-788-6197

URL：http://www-oc.soec.nagoya-u.ac.jp/

E-mail：ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」

講演内容：「江戸時代の法と裁判」

講演者：神保文夫（法学研究科教授）

3月15日(土)、16日(日)

場 所：九州大学医学部百年講堂

時 間：15日(土)13:00~

[問い合わせ先]

物質科学国際研究センター

木原 052-789-5907

文部科学省特別教育研究経費（大学間連携経費）

京都大学・名古屋大学・九州大学「物質合成研究拠点機関連携事業」

第3回物質合成シンポジウム

3月18日(火)

場 所：野依記念学術交流館1階

時 間：10:00~17:05

[問い合わせ先]

研究協力・国際部国際課国際企画掛

052-788-6264

India-NU Workshop on Advanced Nano Materials

内 容：インドの研究者と本学とで開催するワークショップ

講演者：Chintamani Nagesa Ramachandra Rao インド科学大学院大学博士 ほか

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月20日(木)、3月21日(金)
場 所：シンポジオンホール
時 間：9:00~17:00

グローバル COE プログラム
「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」
特別シンポジウム

テ ー マ：「酸素分子活性化に関する金属タンパク質とそのモデル」



[問い合わせ先]
グローバル COE プログラム「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」事務室
052-788-6200

3月22日(土)
場 所：環境総合館 1階
レクチャーホール
時 間：13:00~18:00

シンポジウム「観測がひらく地球惑星科学の未来」
(プログラム)

*参加希望の方は連絡先メールアドレスへ(1)氏名 (2)所属 (3)連絡先 (4)懇親会への参加の有無 を送付してください。

ごあいさつ 山岡耕春 (環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授)
「電磁気観測で見えるもの」 村上英記 高知大学准教授
「アジアの地震観測」 井上 公 防災科学技術研究所総括主任研究員
「広帯域地震計で見えるもの」 石原 靖 海洋研究開発機構技術研究主任
「月探査 LUNAR-A から LUNA-GLOB へ」 藤村彰夫 ISAS/JAXA 教授
「ペネトレータの開発と応用」 名出智彦 (株)IHI エアロスペース
「岩石実験でわかるもの」 増田幸治 産業技術総合研究所総括企画主幹
「今後の地球惑星科学と観測」 古本宗充 (環境学研究科教授)
「地球惑星科学における観測」 山田功夫 (環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授)

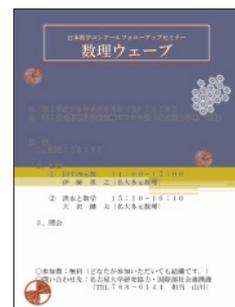
[問い合わせ先]
環境学研究科附属地震火山・防災研究センター (担当：金原)
052-789-3037
メール：kanahara@seis.nagoya-u.ac.jp
http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/yamaoka/events/professorYamada.html

3月22日(土)
場 所：多元数理科学研究科棟
(理学部1号館)509号室
時 間：14:00~

日本数学コンクールフォローアップセミナー
数理ウェーブ

(プログラム)
13:20 開場
14:00~15:00 講演「回す四元数」
伊師英之 (多元数理科学研究科准教授)
15:10~16:10 講演「洪水と数学」
大沢健夫 (多元数理科学研究科教授)

[問い合わせ先]
研究協力・国際部社会連携課
052-788-6144

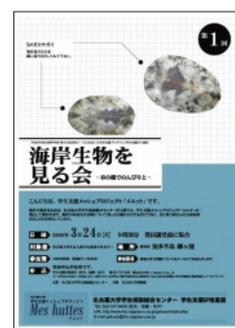


3月24日(月)
場 所：知多半島 (集合は豊田講堂前)
時 間：9:30 豊田講堂前に集合
対 象：名古屋大学生

海岸生物を見る会ー春の磯でのんびりとー
(平成19年度文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム (学生支援 GP)」学生支援メッシュプロジェクト「メユット」)

*要事前申込(左の電話番号に連絡、あるいは e-mail gakuso@htc.nagoya-u.ac.jp あてに、①件名に「海岸生物を見る会参加申し込み」②氏名③所属と学年④連絡先 (携帯電話とメールアドレス) を記入の上送信)

[問い合わせ先]
学生相談総合センター学生支援 GP 推進室
052-747-6456



3月25日(火)
場 所：豊田講堂
時 間：大学院 10:00~11:30頃
学 部 11:50頃~12:50頃

平成19年度卒業式

[問い合わせ先]
学務部学務企画課総務掛 052-789-2159

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月28日(金)

場 所：あいち海上の森センター
(集合は豊田講堂前)
時 間：9:00 豊田講堂前集合
対 象：名古屋大学生

山歩きの会

(平成19年度文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援 GP)」学生支援メッシュプロジェクト「メユット」)

[問い合わせ先]

学生相談総合センター学生支援 GP 推進室
052-747-6456

※要事前申込(左の電話番号に連絡、あるいは e-mail gakuso@htc.nagoya-u.ac.jp へて、①件名に「山歩きの会参加申し込み」②氏名③所属と学年④連絡先(携帯電話とメールアドレス)を記入の上送信)



3月29日(土)

場 所：名古屋市野鳥観察館
時 間：10:30~12:00
対 象：博物館友の会会員

博物館友の会探鳥会

講 師：佐藤 紳司(理学部助教)

※参加申込は3月21日までに博物館事務室あて

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

Fax: 052-789-5896

hakubutu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

3月29日(土)

場 所：医学部附属病院
中央診療棟3階講堂
時 間：14:00~16:00
参加無料

第1回東海がんプロフェッショナル養成プラン

市民講座「がん治療について一緒に考えていきましょう」

特別講演：「心のメッセージを届けます」

金岡益代 あげぼの会愛知支部代表

「がん治療における緩和ケアの役割」

渡邊 正 公立学校共済組合 東海中央病院 病院長

「がん薬物療法の進歩」

佐々木康綱 埼玉医科大学国際医療センター教授

[問い合わせ先]

がんプロフェッショナル養成プログラム
教育委員会(名古屋大学内)

052-741-2111



4月2日(水)~平成21年3月18日

場 所：IB 電子情報館2階大講義室ほか
開講日時：毎月第一・第三水曜
18:30~20:00
(8月、1月は休講)

名古屋大学提携 NHK 名古屋文化センター講座

大河講座「ひとの大学」第一部・天の巻

われわれはどこから来たのか(平成20年度)

~2008年4月スタート、3年間60回シリーズ~

平成21年度：われわれは何者か(人間の定義、生きる真の意味など)

平成22年度：われわれはどこに向かうのか

(人の一生、何を遺すか、ヒトも地球も……)

[問い合わせ先]

NHK 名古屋文化センター 052-952-7330



4月5日(土)

場 所：豊田講堂
時 間：大学院 10:00~10:50頃
学 部 11:15頃~12:10頃

平成20年度入学式

[問い合わせ先]

学務部学務企画課総務掛 052-789-2159

4月14日(月)~5月2日(金)

未定

附属図書館2008年春季特別展

「濃尾の医術—尾張藩奥医師野間家文書を中心に—」(仮題)

[問い合わせ先]

附属図書館庶務掛 052-789-3667



167号(2007年4月) 漕艇(ボート)部



168号(2007年5月) バレーボール部(女子部)



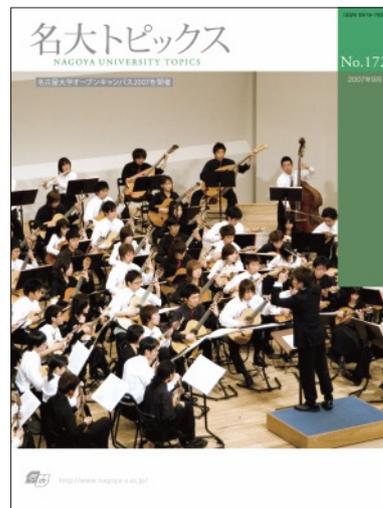
169号(2007年6月) 劇団新生



170号(2007年7月) アメリカンフットボール部 GRAMPUS



171号(2007年8月) 相撲部



172号(2007年9月) ギター・マンドリンクラブ



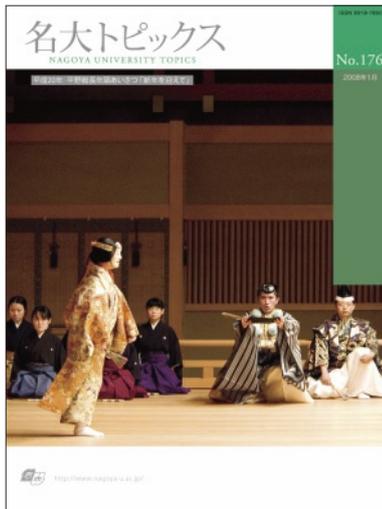
173号(2007年10月) 人力飛行機製作サークル「AirCraft」



174号(2007年11月) 弓道部



175号(2007年12月) 茶道部



176号(2008年1月) 名大観世会



177号(2008年2月) 和式馬術部

名大トピックス No.178 平成20年3月17日発行

編集・発行/名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

愛知県芸術劇場コンサートホールにおいて開催された第30回記念定期演奏会の様子(混声合唱団名古屋大学コーラルグランツェ)(平成20年1月27日)



71 榎文彦氏と豊田講堂 —50年の時をこえて—

2008年2月2日(土)、豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイが大盛況のうちにおこなわれ、その主賓の中に、50年前に豊田講堂を設計し、今回の改修の設計も担当した榎文彦氏(1928年～)の姿がありました。

榎氏は、1952(昭和27)年に東京大学工学部を卒業後、アメリカへ留学してハーバード大学大学院などで学び、ワシントン大学助教授となりました。そして58年、グラハム財団の会員として2年間にわたる建築視察のための世界旅行に出発しますが、豊田講堂を建設することになった竹中工務店の竹中藤右衛門社長が榎氏にその設計を依頼したのでした。竹中社長は榎氏の母方の祖父にあたります。

榎氏が世界旅行中に設計した豊田講堂は、そのデビュー作であると同時に、62年の日本建築学会賞を受賞するなど、日本を代表する建築家榎文彦の出世作ともなりました。今回の改修において、内部施設の充実や耐震補強がなされた一方で、その外観の意匠は維持・復元されたのも、

豊田講堂が日本の代表的な近代建築の一つとして広く認知されているからにはほかなりません。

その特徴は、同じ時期に榎氏の設計により建てられたワシントン大学スタインバーグホール、千葉大学医学部記念講堂と共通する左右非対称の空間構成、日本の建築界の殻を打ち破り、当時の世界の潮流を積極的に取り入れたコンクリート打放し工法、東山キャンパスの地形を十分に生かした造園、など数多くありますが、80m×36mの大きな屋根を細い柱で支え、広い架構を確保した構造がとりわけ印象的です。

かねてより榎氏は、豊田講堂を門としての建物と位置づけており、今回の改修竣工式での挨拶でも、正面から見た豊田講堂を門の略字「門」になぞらえたとの話を聴くことができました。豊田講堂は、明確な正門を持たない名大の象徴化された門であるともいえるわけです。



1	2	3
4		

- 1 豊田講堂竣工式(1960年5月9日)に列席する榎氏(右端)。当時31歳であった。
- 2 豊田講堂改修竣工式であいさつする榎氏。
- 3 柱や壁などの杉板本実型枠を使用したコンクリート打放し。表面に木製型枠の木肌がうかび、近代建築の独特なスケール観と型枠職人の手の跡を感じさせる。
- 4 豊田講堂遠景。榎氏によれば、ホールの天蓋が門の略字の点にあたるという。